

平城京 左京三条一坊七坪

発掘調査報告



奈良国立文化財研究所編

平城京 左京三条一坊七坪
発掘調査報告



卷頭カラー口絵 SK5769出土土器

序

古都奈良に押し寄せる開発の波は最近その激しさをさらに増していく、豊かな文化財に恵まれた景観の変貌とともに、土地に刻まれた歴史も急速に失われようとしている。こうした状況のもとで、平城京内の発掘調査件数もうなぎ登りに増加し、長屋上邸の発見に代表されるような、大きな成果が次々にあがっている。

今回発掘調査した、平城宮南側の地域は、京内の一等地であり、高級貴族の邸宅や京内官衙の存在が推定される地である。近年、その南にある通称大宮通りの利用が一層增大したのにともなって、この附近の開発の件数が増加している。

調査の成果は本書に記述してあるとおりで、坪全体の中に整然と配置された建物の検出や、大量の土器の出土などによって、左京一条一坊における土地利用のあり方について重要な知見を得ることができた。今後の周辺地域における調査の進展の中で、古代平城京の様相がより具体的に明らかになるとを望む次第である。

1993年3月25日

奈良国立文化財研究所長

鈴木嘉吉

目 次

I 序 章	貢
1 調査の経過と概要	1
2 周辺の調査	2
II 遺 構	
1 遺跡の概観	3
2 遺構	4
III 遺 物	
1 土器	10
2 瓦磧	24
3 木製品・石製品・金属製品	25
IV 考 察	
1 条坊と遺構の占地	31
2 遺構の変遷と性格	34
3 史料からみた平城京の宮外官衙	38
4 結語	44

図 版

表紙 調査地と平城宮遠景（南から）	2 SB5758 西から
図鑑 SK5769出土土器	PL. 6-1 SB5757 東から
PL. 1-1 SE5768 南から	2 SB5760 北から
2 SK5769遺物出土状況	PL. 7-1 SB5762・SK5769 東から
PL. 2 調査区全景	2 SB5763 東から
PL. 3-1 調査区北半 南東から	PL. 8-1 SB5761 東から
2 調査区南半 東から	2 SF5776 南から
PL. 4-1 SB5752・SB5754 北から	PL. 9-1 SE5765・SE5766 東から
2 SB5755 西から	2 SE5764 南から
PL. 5-1 SB5753 西から	

巻末折込

遺構図（1:200）

挿 図

- fig. 1 調査地周辺の航空写真（1962年撮影）
fig. 2 発掘調査風景
fig. 3 周辺の調査
fig. 4 周辺の開発状況
fig. 5 SB5752・5754
fig. 6 SB5752 住戸断面
fig. 7 主要遺構配図
fig. 8 SE5764・SE5767
fig. 9 SE5765・5766
fig. 10 SE5768
fig. 11 SK5769土器出土状況
fig. 12 井戸出土土器
fig. 13 SE5768出土土器
fig. 14 SK5769出土土器
fig. 15 SK5769出土須恵器1
fig. 16 SK5769出土須恵器2
fig. 17 土壌出土土器1
fig. 18 土壌出土土器2
fig. 19 施釉陶器他
fig. 20 不明土製品
fig. 21 灰陶片
fig. 22 青銅土器・鏡
fig. 23 SK5774出土土器
fig. 24 SE5767出土土器
fig. 25 SK5770出土土器
fig. 26 古墳時代土器
fig. 27 軒瓦
fig. 28 木製品1
fig. 29 木製品2
fig. 30 曲物
fig. 31 石製品・金属製品
fig. 32 七坪遺構配図
fig. 33 周辺発掘遺構と条坊復原図（1:2000）
fig. 34 遺構変遷図
fig. 35 大学寮図
fig. 36 第133次調査出土木簡

表

- tab. 1 調査経過
tab. 2 関連条坊座標一覧表
tab. 3 七坪四隅の復原条坊座標値
tab. 4 平城宮・京山土「弱」銘青銅土器一覧

例 言

- 1 本書は奈良市二条大路南三丁目179-1 ほかに位置する平城京左京三条一坊七坪の発掘調査報告である。
- 2 調査は民間会社の開発行為にともなう事前調査として、奈良県教育委員会の委託を受けた奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部（部長 町田 章）が実施した。
- 3 調査は平城宮跡発掘調査部の平城宮跡第231次調査に該当し、調査期間は1992年1月8日から3月31日まで、調査面積は2200m²である。
- 4 調査には中村慎一・杉山洋・山崎信二・高瀬要一・浅川滋男・渡辺晃宏が参加し、堀沢祐一・安達志津子・松尾史子・谷川雅紀子・谷口智樹の協力を得た。調査にあたっては奈良県教育委員会事務局の協力を得た。また報告書編集に際し、奈良市教育委員会の協力を得るとともに、松岡綱・吉村順子の助力を得た。なお、不明土製品（126）の用途等については、奈良国立博物館の御教示を得た。
- 5 本書の作成は、平城宮跡発掘調査部長町田 章の指導のもとに調査員全員があたり、全体の討議を経て次のように分担執筆した。
I・III-1・II-1・IV-4 : 杉山洋、II-2・IV-2 : 浅川滋男、III-2 : 山崎信二、
III-3 : 中村慎一、IV-1 : 高瀬要一、IV-3 : 渡辺晃宏
- 6 遺構・遺物・図版の写真は佃 幹雄・牛嶋 茂・杉本和樹が担当し、森本佐由理の協力を得た。
- 7 本書の編集は杉山が担当した。



fig.1 調査地周辺の航空写真 (1 : 5000 昭和37年撮影)

I 序 章

1 調査の経過と概要

当該地区は通称大宮通りに面する地であり、近隣地区に大型商業施設が進出したこともあり、近年とみに商業地として開発が進んできている。

今回、二条大路南三丁目179-1において、民間会社による開発の申請がなされた。当該地区は平城宮左京三条一坊七坪に当り、平城宮や朱雀大路から至近の地にあり、奈良時代の重要遺構の存在が推定された。そこで、奈良県教育委員会と協議の上、工事に伴う発掘届が提出された。発掘届にもとづき、奈良県・奈良市と奈良国立文化財研究所の間で協議の結果、奈良県教育委員会の依頼により、奈良国立文化財研究所が発掘調査を担当することになった。

敷地面積3200m²のうち、調査用プレハブなどの用地を除く2200m²について、発掘調査を行った。1月7日に関係者立会いのもとに調査地区を設定した。調査地の北端と南端は、トラックの進入路として厚い盛土がなされ、一部にはコンクリート舗装が残っていた。このため、当該部分を除いて調査区を設定した。翌8日から重機によって盛土・旧耕土・床土の除去に取りかかった。1月13日から、作業員による本格的な発掘調査にはいった。実際の調査経過は、tab.1を参照されたい。

調査前の当該地には、大型の鉄骨スレート葺き倉庫が建っていた。その基礎が、調査区中央に5m間隔で15基並ぶ。さらに、倉庫以前に存在した工場の機械設置のために掘削された巨大な土壙で、調査区の西南部約500m²が搅乱され遺構が残らない。さらに、倉庫の基礎の東側を、コンクリート管による暗渠が南北に貫流する。これ以外にも、至る所に現代の搅乱層が存在し、調査は、まずこれらの搅乱層の始末から始めなければならなかった。幸いなことに、搅乱以外の面では奈良時代の遺構面が残っており、掘立柱建物13棟、井戸5基、大形の土壙2基、道路2条などの遺構を検出した。



fig.2 調査風景 (SK5769の発掘)

1月8日-10日	重機による土砂除去
1月13日	調査開始
1月22日	SK5769検出
2月6日	SB5758柱穴検出
2月15日	SB5752検出
2月29日	南端の部分的的掘張はじめる SK5769振り下げ
3月5日	記者発表
3月7日	現地説明会
3月9日	空撮・遺構全景の写真撮影
3月11日	地上写真撮影
3月12日	断面調査開始 井戸振り下げ
3月25日	複数層の埋め戻し開始
3月27日	断面調査・土壤図作成完了
3月31日	部分的な埋め戻し完了
4月1日	撤収

tab.1 調査経過

2 周辺の調査

調査地周辺では、レストラン建設や駐車場造成、住宅改築などに伴う発掘調査がおこなわれている（fig.3）。

まず条坊関係では、奈良国立文化財研究所が1978年に行った平城宮第103-15次調査で、七坪と二坪を画する坪境小路西側溝を検出している。調査地の東、市道の東脇で奈良市教育委員会が1983年に行った調査では、七坪の東を画し、平城宮南西東門・壬生門に達する東一坊坊間路の西側溝と、それに伴う築地塀を検出している。七坪の北限については、奈良市教育委員会が1986年に行った第119次調査で、一坪と二坪の坪境小路が検出されており、東へ延ばすと調査対象地の北にある北新大池の堤のやや北に位置する。

七坪のなかでは今回が初めての調査であるが、周辺の坪では、ある程度坪内の状況が明らかになっている。

西隣の二坪では、1988年に奈良市教育委員会による第143次調査が行われ、南北方向の掘立柱列と礎石据付痕跡が検出された。

東隣の十坪では、中央西寄りで、1991年に奈良市教育委員会第219次調査が行われ、掘立柱建物6棟、掘立柱塀1条などが検出された。十坪の南西部では、1992年に平城宮第234-10次調査が行われ、小形の井戸1基が検出された。坪中央であるにもかかわらず、建物の規模は比較的小形である。ところがその隣の十五坪では、駐車場造成に伴う比較的大規模な調査が1992年平城宮第230次調査として行われ、坪中央に五間四面の主殿、両に桁行七間、梁間二間の前殿、左右に桁行九間、梁間二間の脇殿をようする、大形掘立柱建物群（のち礎石建物に建て替え）の存在が明らかとなった。さらに北側の坪境小路想定地付近に築地塀があり、十五・十六坪が一体となった二町占地の土地利用がうかがわれる。



II 遺構

1 遺跡の概観

調査地の北には、北新大池があり調査地との間には池の築堤が東西に存在する。調査地の南には通称大宮通りが、東には市道が通る。いずれも調査地より1mほど高く、築堤状をなす。調査地の西だけに現在も畠と水田が残り、調査地も工場用地となる前は水田で、水田面は東へ向かうに従い、徐々に低くなる、平城宮第一次朝堂院地区の乗る尾根の末端が調査地西側にまで延びてきているためである。調査地の市道をはさんだ東側一帯も現在は水田であるが、近隣の開発にともない駐車場用地としての開発が盛んである。

調査地の層序は、一部に残る盛土の下に水田時代の旧耕土・末土があり、その下に遺物包含層である黄褐色粘土層がある。黄褐色粘土を除去すると、暗褐色粘質土の地山上で奈良時代の遺構が検出された。今回の調査では、一部に古墳時代の土壤と思われる遺構を検出したが、搅乱のため全容は明らかでない。調査地北半部には東西方向の耕作溝が検出されたが時期は明らかでない。遺物は前後の時代を含む。黄褐色土層は、弥生式土器片から中世の竈泉窯系青磁碗の破片までの広範囲の遺物を含む。調査地中央東よりのSK5772周辺に堆積する黄褐色粘土層下の暗灰褐色砂質土中からは、6世紀代の須恵器がまとまって出土した。



fig.4 周辺の開発状況

2 遺構

今回の調査では、13棟の掘立柱建物のほか、6基の土壙（大量に土器を捨てた穴）、5基の井戸、道路2条、掘立柱跡1条や素掘りの溝などが発見された。以下、各遺構ごとに解説する。遺構は一連の番号を付し、遺構の種別を表すために、SA 壤、SB 建物、SD 溝、SE 井戸、SF 道路、SK 土壙の記号を遺構番号の前に付し表記する。

A 掘立柱建物

SB5751 発掘区の北西隅に位置する梁間2間（4.2m）×桁行2間（3.2m）以上の南北棟で、柱間寸法は桁行方向で1.6m（5.5尺）等間、梁行方向で2.1m（7尺）等間である。桁行柱穴（掘形）は1辺が40～50cmと小さい。

SB5752 発掘区の北西隅ちかくに位置する南庇つきの南北棟。平面は桁行3間（5.5m）×梁間4間（5.6m）で、身舎の梁間を3間と長くとるところが特徴的である。柱間寸法は、桁行方向が1.8m（6尺）等間、梁行方向が1.4m（4.5尺）等間で、庇の出も1.4mである。柱穴は、身舎・庇とともに1辺が40～80cmで、東妻と南側柱筋で4本の柱根が残っており、最大のもので直徑18cm（6寸）ある（fig.6）。

SB5753 発掘区の北半中央から東壁にのびる長大な南庇つきの東西棟。近代の搅乱により、多くの柱穴が失なわれているが、平面は梁間3間（4.2m）×桁行5間（13.0m）以上と推定される。柱間寸法は、身舎が桁行方向で2.6m、梁行方向で2.7mと、いずれも9尺等間に復原できるが、庇の出はこれより長く、3.0m（10尺）となっている。柱穴は他の建築遺構よりも大きく、身舎で1辺90～110cm、庇で1辺60～80cmである。

SB5754 発掘区の北半西よりに位置する東庇つきの南北棟で、桁行5間（9.9m）×梁間3間（6.3m）の平面を明確に検出した。柱間寸法は、身舎が桁行方向で2.0m（7尺）等間、梁行方向で1.9m（6.5尺）等間であるが、庇の出は2.5m（8.5尺）で、SB5753と同じく、身舎柱間よりも長くとっている。柱穴はSB5753よりもわずかに小さめで、身舎が1辺90～100cm、庇が60～90cmである。



fig.5 SB5752・5754

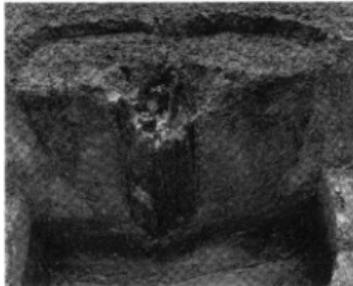


fig.6 SB5752 柱穴断面

SB5755 発掘区の北半西よりに位置する、桁行5間(9.5m)×梁間2間(3.8m)の東西棟。柱間寸法は、桁行・梁行方向ともに1.9m(6.5尺)である。柱穴は1辺50~80cmで、13棟のなかでは中規模に属する。

SB5756 発掘区の中央西よりに位置する2間(5.6m)×1間(2.1m)以上の建築遺構だが、北半部分が搅乱のため検出できず、全体平面は確定していない。しかし、遺構の北側に柱筋のそろう柱穴が存在しないので、2間×2間の小規模な東西棟に復原できよう。柱間寸法は桁行方向で2.6m(9尺)等間、梁行方向で2.1m(7尺)である。柱穴は、一辺50~70cm。

SB5757 発掘区のはば中央に位置する南庇つきの東西棟。井戸SE5767を埋めた上に、この建物を建てている。桁行3間(4.8m)×梁間3間(5.9m)で、身舎の柱間寸法は桁行方向で1.6m(5.5尺)等間、梁行方向で1.9m(6.5尺)等間である。庇の出は2.1m(7尺)で、やはり梁行柱間より長くとっている。柱穴は身舎が1辺60~80cm、庇が50~70cmで、南側柱筋の西から2列めに柱根がのこっているが、腐朽がいちじるしい。

SB5758 発掘区東壁が銳角状に突起する部分に位置する南庇つきの東西棟。桁行2間(5.9m)以上×梁間3間(9.5m)で、身舎の柱間寸法は桁行・梁行方向とともに3.0m(10尺)等間だが、庇の出は3.5m(12尺)と身舎柱間より長くとる。柱穴は、身舎が90~120cm、庇が60~80cmと13棟のなかでは最も規模が大きい。遺構の中央~東半部分は市道の下で今後しばらくは発掘不可能と思われるが、柱穴規模および梁間寸法との関係などからみて、桁行5間以上の大規模建物である可能性が大きい。

SB5759 発掘区の中央西よりで、SB5756のわずかに南に位置する東西棟。搅乱のため、南側柱筋の柱穴の大半が失なわれているが、北側柱および東西両妻の柱穴

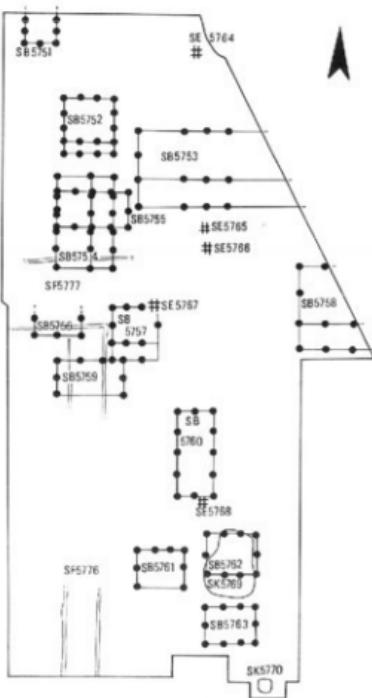


fig.7 遺構配図図

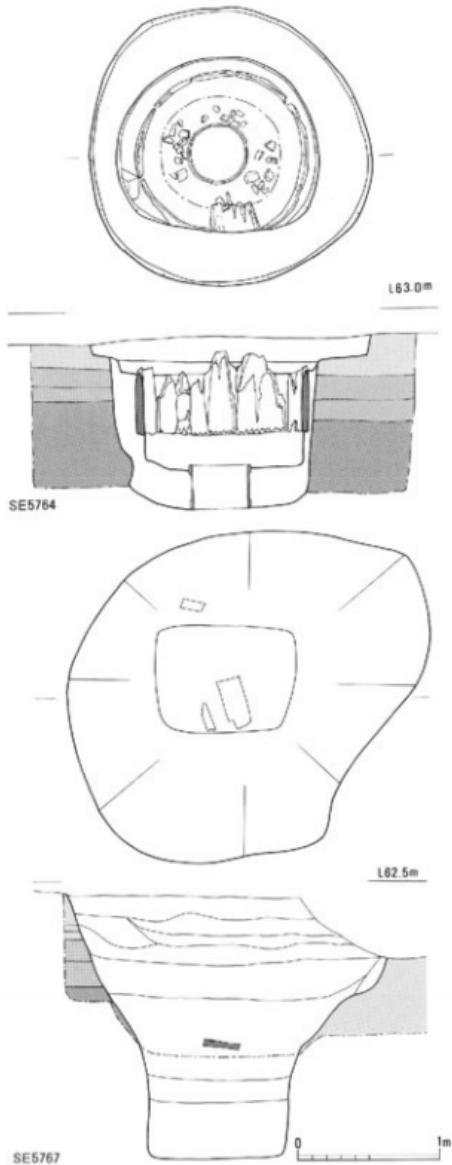


fig.8 SE5764・SE5767

はいずれも明確で、3間（6.5m）×2間（3.5m）に復原できる。柱間寸法は桁行方向で2.2m（7尺）等間、梁行方向で1.8m（6尺）等間である。柱穴は1辺が50～90cmで、東妻の中央柱穴に柱根（直径9cm）が残る。

SB5760 発掘区の中央南よりに位置する南北棟。桁行4間（9.4m）×梁間2間（4.0m）で、柱間寸法は桁行方向で2.4m（8尺）等間、梁行方向で2.0m（7尺）等間である。柱穴は1辺が50～90cmとばらつきがある。

SB5761 発掘区の南半中央に位置する東西棟。搅乱によって南北側柱のうち3本分の柱穴が検出できなかつたが、桁行3間（6.0m）×梁間2間（3.8m）に復原できる。柱間寸法は、桁行方向で2.0m（7尺）等間、梁行方向で1.9m（6.5尺）等間である。柱穴は1辺が50～80cmで、中規模にあたる。

SB5762 発掘区南半中央東よりに位置する東西棟。大土壙SK5769が埋められたあとに建てられた、桁行3間（6.0m）×梁間2間（4.8m）の掘立柱建物である。柱間寸法は、桁行方向で2.0m（7尺）等間、梁行方向で2.4m（8尺）等間である。柱穴は1辺が40～80cmで、西妻柱と東南隅柱に柱根（直径11cm・14cm）が残る。

SB5763 発掘区東半中央南壁よりに位置する東西棟。桁行3間

(5.5m) × 梁間 2 間 (4.0m) で、柱間寸法は桁行方向で 1.8m (6 尺) 等間、梁行方向で 2.0m (7 尺) 等間である。柱穴は 60~90cm と、平面規模のわりには大きめといえる。西南隅柱の柱根 (直径 7 cm) が残る。

B 井戸 (fig. 8-10)

SE5764 発掘区北東隅に位置する円形縦板組井戸。掘形・井戸枠ともに円形で、掘形の直径約 2 m、井戸枠の直径約 1.2 m である。井戸枠は、湾曲加工した縦板を 6 枚をつなぎあわせて円筒形をつくる独特の構造で、底の中央には曲物をする。曲物の周囲には小石と瓦の小片を敷く。

SE5765・5766隣接する 2 基の井戸で、掘形の重複関係からみると、南側の SE5766 が古く、北側の SE5765 が新しい。

SE5766 は方形縦板組の井戸枠 (90×90cm) を残し、掘形も方形である。3 段の横桟の

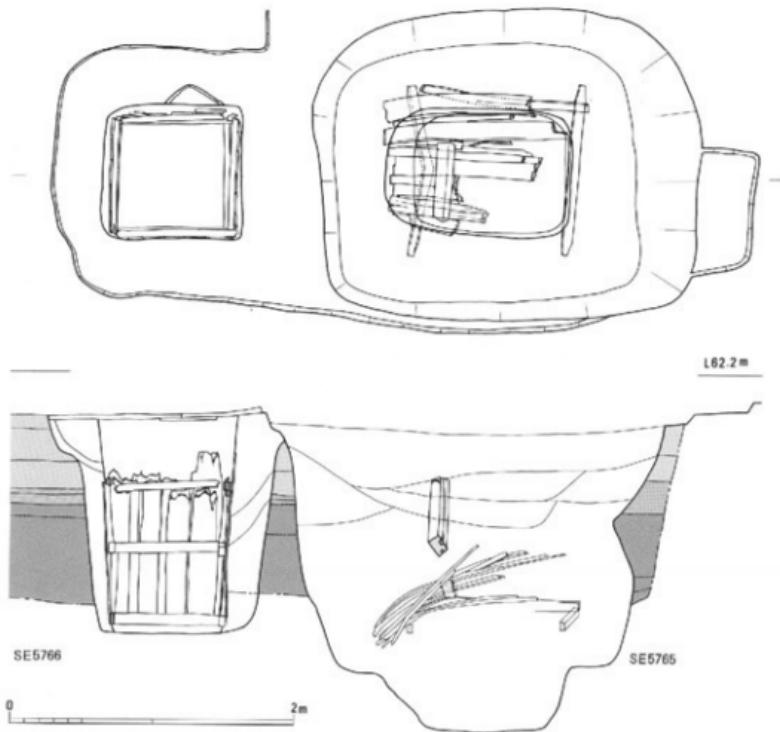


fig.9 SE5765・5766

外側に、各面6～8枚の縦板をおく。

SE5765は直径約2.5mの大きな楕円形の掘形の中央に、方形縦板組井戸枠をおく。井戸枠はほとんど抜き取られているが、おそらく抜き取り時に掘形が崩落したためだろう、最下段の横桟4本と、南側の縦板、縦桟の一部が残されていた。横桟は長さ約1.2m。縦板は計11枚が残り、北側に大きく湾曲しながら倒れ込んでいた。縦桟の一部には、井戸と関係のない仕口と、鉄釘が残されており、転用材である。

SE5767 発掘区のほぼ中央に位置する。一辺約2.2mの隅丸方形状の掘形をともなうが、搅乱により東側約半分が失われている。井戸枠はほとんど抜き取られ、かろうじて縦板1枚だけが残存する。

SE5768 発掘区の南半中央東よりに位置する小形の井戸。掘形は1辺が2.0～2.4mの不整長方形を呈し、井戸枠は1辺約70cmの正方形横板組。横板は北面が5段で、他は4段。横板の外側には、各面7～9枚の縦板をおく。横板に統けて曲物を2段にする。

C 土 壤

SK5769 発掘区南半中央東よりに位置する。南北7m、東西6mの大きな不整形土壌

で、深さは50～60cmと浅いが、大方の須恵器甕Aをはじめ大量の土器が出土した。底面に張り付いた状態で出土した土器群には、完形の須恵器が多く含まれる。須恵器甕Aも分散することなく同一個体の破片がまとまって出土している。ただし甕を据え付けた痕跡は認められない (fig11)。

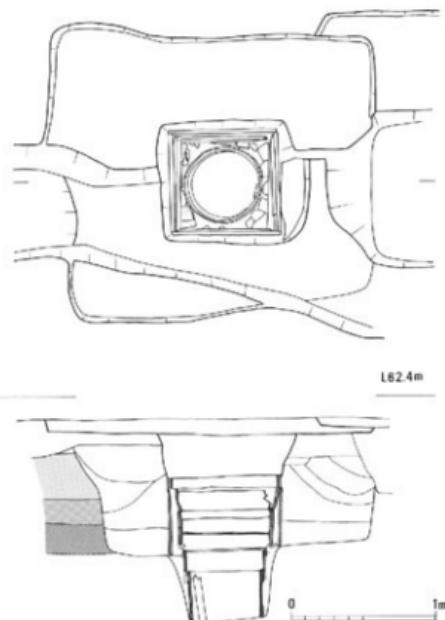


fig.10 SK5768

SK5770 発掘区南東隅の拡張区に位置する。東西約2m、南北1.5mの不整形土壌で、平面規模はSK5769よりも小さいが、深さは約1mと深く、大量の土器と銅製帶金具が出土した。

SK5771・5772・5773・5774
いずれも平面不整形で浅い土壌。

D 塚・溝・道路

SA5775 SB5760の東側前方1.8

m（6尺）の位置にならぶ掘立柱の南北溝。総長9.0m、5間の溝で、北端をSB5760の北妻にそろえる。柱間寸法は、1.8m（6尺）等間。

SF5776 発掘区の南半西よりで、南北方向に通る道路。道路幅は、両側溝間の心々距離で3.6m（12尺）。大きな擾乱によって南北に分断されており、南端は発掘区南壁からさらに南にのび、北端は東西溝SD5780によって区画される。SD5778が東側溝。残存遺構の上面幅49cm、深さ28cmの素掘り溝。SD5779が西側溝。残存遺構の上面幅42cm、深さ15cmの素掘り溝。

SF5777 発掘区の中央東よりで、東西方向に通る道路。道路幅は、両側溝間の心々距離で7.2m（24尺）。道路の西端は発掘区からさらに西にのびるが、東側はSD5779とSD5780が交差するあたりで途切れしており、東端が明瞭ではない。SD5780が南側溝。いくぶん北にふれた東西溝であり、東端でSD5779と合流する。上面幅30～45cm。SD5781が北側溝。SD5780とはほぼ平行で、やはりわずかに北にふれた東西溝である。上面幅20～40cm。

SD5782 発掘区北半中央をながれる蛇行溝。西端はSB5754の西側柱列からはじめり、SB5754の下層をいくぶん南下してから東へのびてSE5765に分断されつつ、その東までのびる。上面幅30～40cm。

SD5783 発掘区北壁から東壁に向かってながれる斜行溝。上面幅30～50cm。

SD5784 発掘区東壁から西に約2mのところをながれる南北溝。遺物包含層の上面からすでに遺構を確認できたが、地山面まで掘り下げたため、遺構はあさくなり、一部は失われ分断される。上面幅15～45cm。



fig.11 SK5769土器出土状況（1:60、略号：須=須恵器、土=土師器、番号はⅢ遺物の土器番号）

III 遺 物

1 土 器

調査区全域から、整理箱99箱分の土器が出土した。なかでも調査区南東の2カ所の土壙、SK5769と5770からは完形土器を含む奈良時代の多量の上器が出土した。この他散在する土壙や井戸からも、まとまった土器の出土が見られる。調査区中央東寄りに堆積する暗灰褐色砂質土からは奈良時代の土器にまじって古墳時代の須恵器がまとめて出土した。

主要な遺構の出土土器を井戸出土土器、土壙出土土器、墨書き土器、硯、施釉陶器他、古墳時代土器の順に記述する。

上器の器名・製作手法の分類と呼称については、既刊の『平城宮発掘調査報告』に従うこととする。I群土器・II群土器の群分けについては、土師器では判別のつくものについては極力これを記載することとし、須恵器では、多くがI群土器であるためI群上器以外について特記することとした。

井戸出土土器 (fig. 12・13)

SE5764 調査区北端の円形縦板組井戸。遺物の出土は少なく、土師器杯Aと須恵器壺M各1点が出土した。
土師器杯A (2) 内外面の磨滅が著しく、調整手法は不明、口縁部内面側がわずかに丸く肥厚する。
須恵器壺M (1)、砂粒を多く含む胎土で、作りが雑である。

SE5765 井戸枠の抜き取り途中で、崩壊しそのままとなった井戸。遺物について井戸枠の内か外かの判別はできなかった。

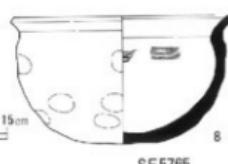
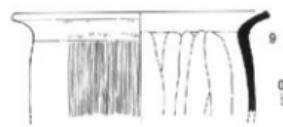
土師器皿A (3) は、底部から口縁部にかけてをへら削りするc0手法。
須恵器杯B・同蓋 (5・6) 6外面には火摺がある。
皿C (4) 底部外面を粗くへら削りする。火摺が見られ焼けひずむ。
土師器壺B (7・8) 7は精選された胎土で、底部にかけて器壁がうすくなる。8は器軸が厚く、粘土紐のつぎ目を残す。
土師器壺A (9) 内面を縦方向にいねいにへら削りし、外表面は縦方向のハケ目調整とする。9は、スヌの付着が認められるとともに、熱を受け、赤褐色を呈する部分がある。この他に、放射1段暗文のある土師器杯A II縁部破片がある。

SE5767 SE5765の西側で検出した井戸、縦板1枚だけをかろうじて残し、井戸枠はすべて抜き取られる。遺物は掘形か抜き取りかの判別不可能。

土師器皿A (10) は口縁部をヨコナデ、底部外面を不調整とするa0手法。ラセン暗文+放射暗文をもつ、I群上器。
須恵器杯B (12-14) 12・14は砂粒を多く含む胎土で、14は焼成が甘く、灰褐色を呈する。13は比較的精良な胎土。
須恵器皿A (11) は、口縁部はやや内湾気味に垂直に立ち上がる。底部外面は全面へら削りとする。胎土には、砂

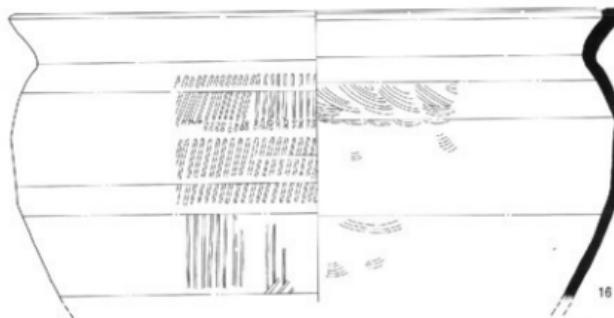
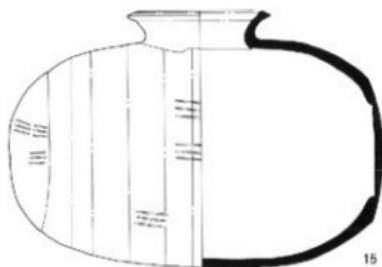


SE5764



15cm

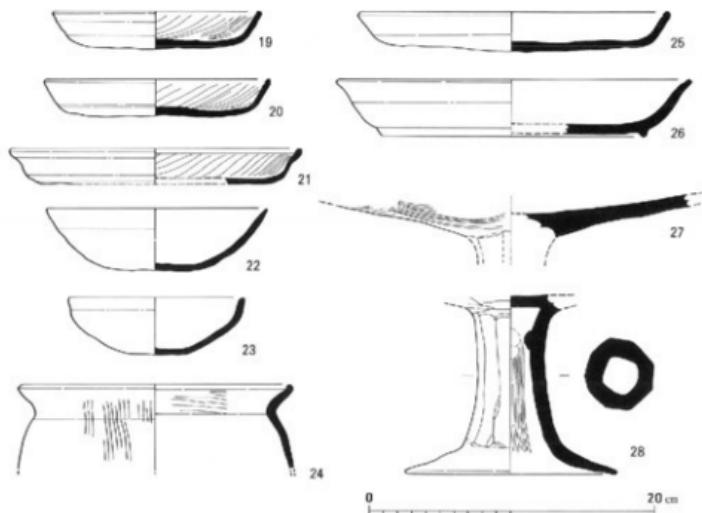
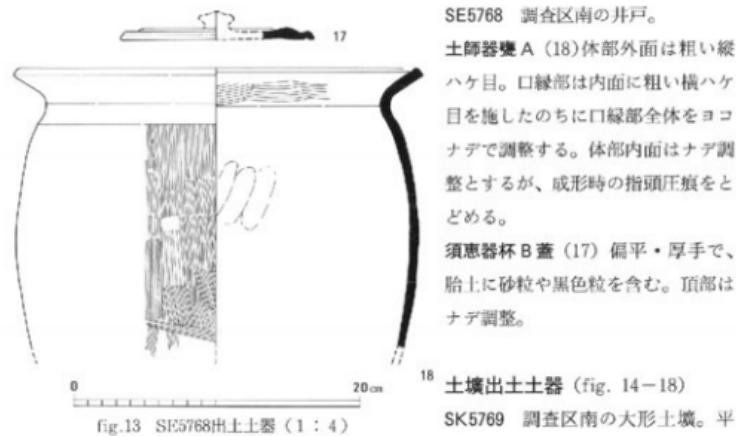
SE5765



SE5767

fig.12 井戸出土土器 (1 : 4)

粒を多く含む。蓋の可能性も考えられる。須恵器横瓶（15）は最下脣から完形で出土した。体部を粘土紐で成形し、軽く叩いたあと、横方向にナデ調整を行なう。口頸部を取付け、右端をふさぎ削りで仕上げる。一部に降灰が認められる。須恵器甕 C（16）同心円当具と平行刻み目の叩板で成形したのち、外面は幅1cm前後のロクロなでを3~4cmの間隔で横方向にいれる。内面はナデによって当具痕がほとんど消される。



面不整形で浅く、埋土は单一の赤褐色粘質土。大量の土器が出土した。土師器は須恵器に比べて細片が多く、全形の知られる資料が少ない。このため今回は計数処理を断念せざるを得なかつたが、須恵器に比べ土師器の分量は少ない。

土師器 ■A 4点。須恵器の壺A(76)の体部破片とともに土壤底から出土した。いずれも口縁部外面を横ナデ調整。底部外面を不調整とし、ミガキを行わない。a0手法。25を除く3点(19-21)には、口縁部内面に粗い放射状暗文を施す。25の底部外面には本葉压痕をとどめる。19・25がI群土器。 ■B 器壁が厚く、高台は低い。調整不明。

I群土器。 槌A 口縁部をヨコナデするが、以下の調整は不明。II群土器。 槌C 口縁部をヨコナデし、以下は不調整とする。 高杯 2点。27はかなり大型の高杯。外面に丁寧なミガキを施す。脚柱部28は27とは別個体。脚柱部は縦方向の削りによって9面に仕上げる。脚部内面下半は粗く削る。脚柱部内面には成形時の余分な粘土塊が残る。

壺A(24) 口縁部から体部にかけて非常に粗いハケ目を残す粗製の壺。

須恵器 杯A(38-40・49-50) 38-40・49-50の4点は焼きがあまく、灰白色から茶灰色に焼き上がる。いずれも底部外面にヘラ切り痕をとどめる。II群土器。 杯B 大きさによって、口径19cm前後のA I(54-60)。口径15cm前後のA III(46-48)。口径12cm前後のA IV(43-45)。口径10cm前後のA V(32-37)。ほとんどがI群土器で、青灰色を呈し、硬質の焼きとなる。34は内面が暗紫色を呈し、猿投産的可能性がある。37は高台内面に墨痕があるが判読できない。 杯B蓋(52-53)、杯B III蓋(41-42)、杯B V蓋(29-31)に分けられる。41以外はI群土器。41は小砂粒を多く含む胎土で、灰白色に焼き上がる。上面全面に暗灰緑色の自然釉がかかる。 杯E(51) 灰白色の軟質の焼き。表面の磨滅が著しく調整手法は不明。 ■B(65-66) いずれも底部外面をヘラ削り、口縁部をロクロなどとする。65は灰白色。66は灰色に焼き上がる。 ■C(63-64) 杯Aと同じく灰白色に焼き上がる。 壺C(61) 体部をロクロなどとし、底部をヘラ切り不調整とする。口縁部を欠失するがほぼ完形。 高杯(62) 脚柱部から杯部外面にかけてロクロなどで、杯部内面はヨコナデとする。精良な粘土で灰色を呈する。 壺A(74) 完形。土壤底で、壺A(76)の体部破片に混じって出土した。体部下半をロクロ削りとし、その他はロクロなどで仕上げる。肩部に薄い降灰がみられる。 壺K(72-73) 72は高台のない器形。底部外面を除く全面をロクロなどとし、底部外面には糸切り痕を残す。肩部から頭部にかけて濃緑色の釉が厚くかかる。壺Qと同様の胎土・釉調を示す。73は、高台のつく器形。頸部から上を欠失する。体部下半の高台直上に左上がりの平行タタキが部分的に残る。タタキで成形の後、ロクロ削りを行い最後にロクロなどで調整する。高台と体部との境には強いなどが入る。肩部に厚く釉がかかるが、一部釉化せず灰色となる。胎土に黒色粒子を多く含み、削りによってぼかしたように黒色粒子が流れ。II群土器。 壺L(70) 体部下半の破片。外面はロクロ削りした後、ロクロなどで調整。底部内面に自然釉がかかる。

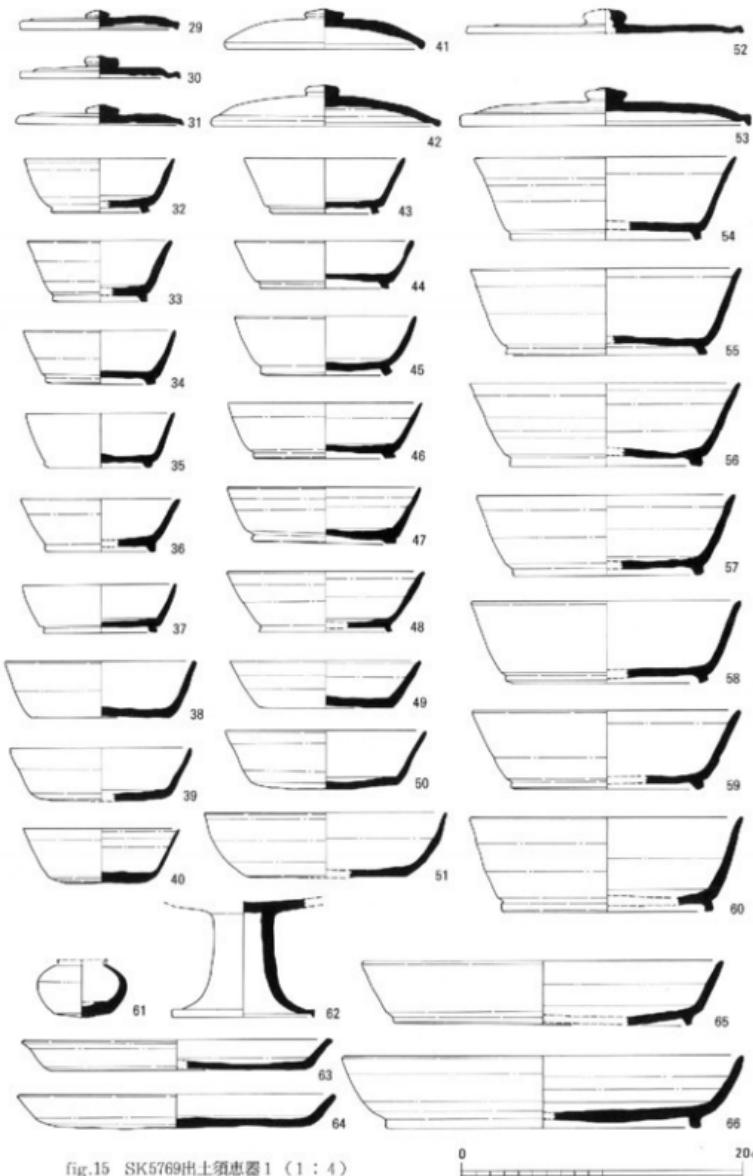


fig.15 SK5769出土須惠器 1 (1 : 4)

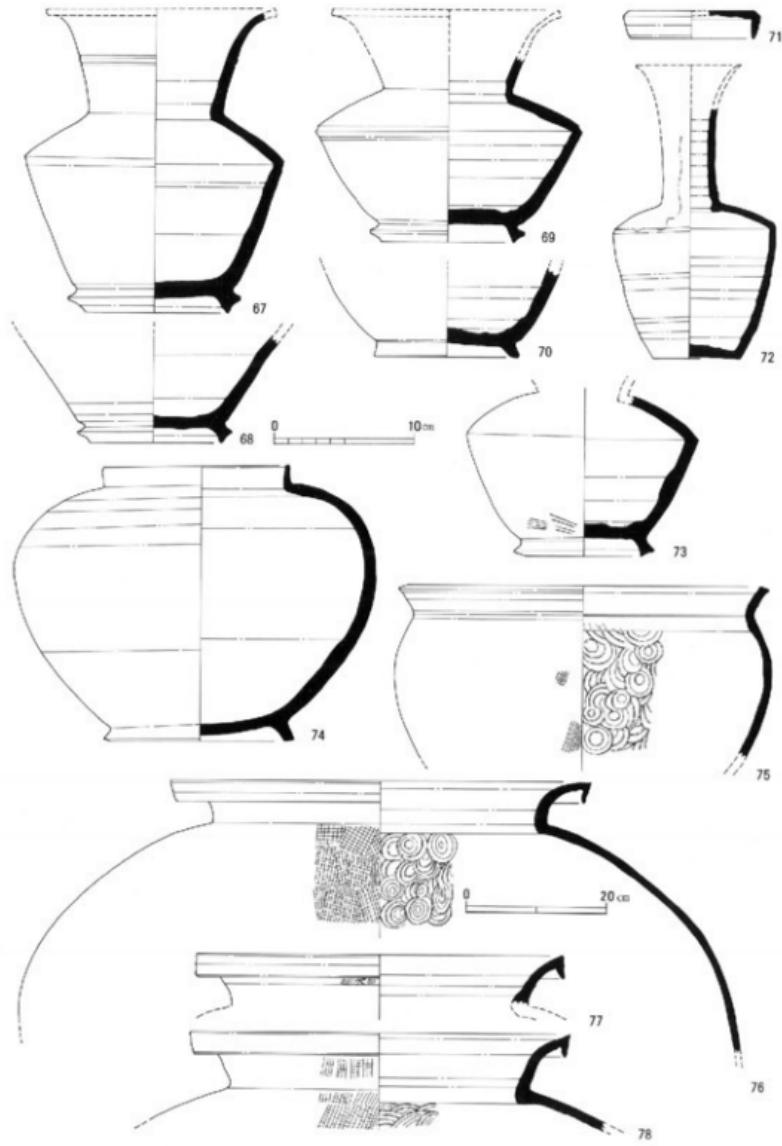


fig.16 SK5769出土須惠器 2 (67-75 1:4 76-78 1:8)

る。 壺 Q (67-69) いずれも砂粒を多く含む胎土で、灰色に焼き上る。肩部・口縁部内面・底部内面に濃緑色の釉が厚くかかり、67では体部から高台へと流下する。体部外面をロクロ削りした後、全面をロクロなどで調整する。高台は断面が三角形に張り出す特徴的な形となる。 壺 A (76-78) 口径59.6cm (76)、口径54cm (77)、口径52cm (78) を計る大形の壺。76は口縁部から体部中位までの破片が接合でき、底部の破片もある。底部破片には焼台の痕跡が4箇所に認められる。自重のためか底部にかけてひしゃげた俵形に近い形となるようだ。復原体部径は約110cm、復原高約90cm。77は口縁と体部の破片が残り、78は口縁部の小破片のみである。いずれも口縁部端に大きな縁帶をつけ、頸部から体部全面を格子目タタキで成形、内面には同心円当貝痕を残す。78の頸部には「大」の線刻がある。砂粒を多く含む胎土。 壺 C (75) 体部外面に格子目タタキ、内面に同心円当貝痕を残す。外面はタタキの後ていねいなで調整を行うため、タタキはほとんどで消される。焼成は軟質で灰白色を呈する。 壺蓋 (71) 器形は壺蓋 A に類似するが、形が小さいので壺 K や L の蓋と考えた。上面が降灰のため灰白色となる。壺 K (72) と壺 Q (67-69) は、灰色に焼き上り、濃緑色の釉がかかる。陶邑古窯跡群の製品とはあきらかに異なる。東海もしくは北陸地方の製品の可能性がある。

SK5770 SK5769同様、土師器が少なく須恵器が多い。

土師器 杯 C (80-82) いずれも口縁部をヨコナデし、底部外面は不調整とする a 0 手法。I 群土器。 盆 A (83-84) いずれも口縁部をヨコナデし、底部外面は不調整とする a 0 手法。84では底部外面の中央に指頭圧痕が残る。83はII群土器。84はI群土器。 盆 C (79) 口縁部をヨコナデし、底部外面は不調整とする。盆 C としては器高が大きい。 壺 A (105) 口縁部をヨコナデ、体部外面は粗いハケ目で調整する。内面は粗くヨコナデするが、指頭圧痕も残る。底部外面にすすが付着する。

須恵器 杯 A (93-94) いずれも底部外面にヘラ切り痕を残し、口縁部外面はロクロなで。93は砂粒の少ない精良な胎土で、焼成は軟質。94は砂粒を多く含む胎土で、焼成は堅緻。外面に重ね焼きによると見られる焼けむらがある。 杯 B (89-92) 89-90 は杯 B V。底部外面にヘラ切り痕をとどめ、口縁部はロクロなでとする。91は杯 B II。胎土に黒色粒子を多く含む。底部外面に墨書きがある。92は杯 B I。軟質で灰白色を呈す。口縁部外面中位から上が黒変する。 杯 B 蓋 (85-88) 85から87の3点は、口縁部 A 形態で、全面をロクロなでとする。暗灰色。88は口縁部 B 形態で、頂部上面をロクロ削りとする。口縁部内面に幅1cm前後の降灰がみられる。 壺 M (104) 高台と体部の境が不明瞭で、高台の貼り付けや全体の調整が難である。胎土に砂粒を多く含む。

高杯 (106) 大形の高杯。脚柱部外面から杯部外面をロクロなでとする。脚柱部中位に沈線が入る。焼成は軟質で灰白色。 鉢 D (109) 内外面をていねいなで調整とする。焼成は軟質で灰白色。 壺 B (107-108) 107は体部外面に格子目タタキを残すが、ていねいなでによって消された部分が多い。体部内面は、口縁部直下にのみ指頭圧

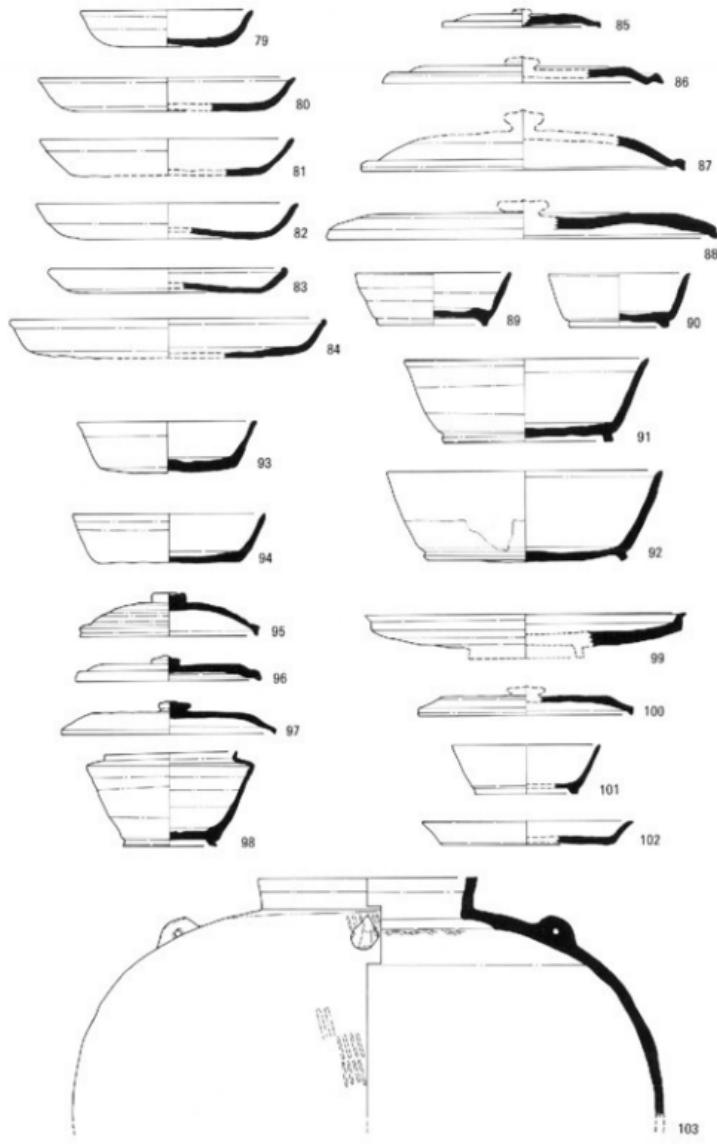


fig.17 土壤出土土器 1 (1 : 4)

0 20 cm

痕があり、それ以外の内面には同心円当貝痕が残る。底部には焼き台として使用した杯B蓋が融着する。体部上半に厚く濃緑色の釉がかかり、下半部に流下する。ほぼ1個体分の破片がある。胎土や焼成、釉調が、SK5769出土の壺Qに類似する。108は、体部外面に粗い平行タタキ目。内面に同心円当貝痕を残し、口縁部はヨコナデとする。 壺C (110・111) 110は内外面をていねいにヨコナデする。体部外面にはかすかに格子目タタキの痕跡が残る。焼成は軟質で、灰白色。111は外面に右上がりの平行タタキ目。内面に同心円当貝痕を残す。口縁部は内外面ヨコナデ。体部外面はタタキの後、帯状にヨコナデを施す。焼成は堅緻で灰色。口縁部外面に「++」の線刻がある。

SK5773

須恵器 杯B (101) 杯B V。内外面ロクロなで調整。 盆A (102) 底部外面は不調整。その他はロクロなで。 杯B 蓋 (100) 頂部上面をロクロ削りとし、口縁部はロクロなで。「石」の墨書がある。 壺E (103) 外面に粗い格子目タタキ、内面に同心円当貝痕を残す。タタキ形成の後、内外面をていねいなで調整を行うためタタキ痕と当貝痕はほとんどで消される。体部は薄く仕上げられる。肩部の4箇所に耳を付ける。耳は半円形の粘土板に竹管状の工具で穴をあけ体部に貼り付ける。肩部に厚く自然釉がかかり、体部中位へと流下する。ほぼ1個体分の破片が残される。器形、胎土、釉調などが、SK5769出土の壺Qなどに類似する。

SK5774

須恵器 杯B 蓋 (95-97) 95は頂部上面をロクロ削りとし、それ以外はロクロなで。なでによる凹凸が顯著。口縁端部が黒褐色に変色し内面に降灰がみられる。胎土や口縁部の形状などからV群土器、猿投座と推定される。96、97はいずれも口縁部を中心にロクロなでを施す。焼成は軟質で灰白色から灰色。 盆B (99) 焼成軟質で灰褐色を呈する。外面をロクロ削り後ロクロで。口縁部から内面にかけてロクロなで。これもV群土器か。壺E (98) 底部ヘラ切り後、全面をロクロなでとする。内面にロクロなでによる凹凸が顯著。

墨書土器・硯 (fig. 19)

墨書土器10点。線刻上器2点が出土した。

SK5769からは、須恵器杯B V (37)「厨」、須恵器杯B I (112)「加」、須恵器盆C (63)「田」、須恵器杯B (114)「田」。SK5770からは、須恵器杯B I (91)「飯」。SE5768からは、須恵器杯B (115)「米」、須恵器杯B (119)「大大」の線刻土器。SE5764からは、須恵器杯B (118)「正」。SK5773からは、須恵器杯B 蓋 (100)「石」。SK5774からは、須恵器杯B 蓋 (113)「加」。調査区中央東よりに堆積する暗灰褐砂質土からは、須恵器杯A I (117)「大」、須恵器壺G (116)「井」線刻土器が出土した。

硯 (120-122)

蹄脚硯 (120)。復原径25.6cm。黒色粒を多く含む胎土で焼成は堅緻。脚部に降灰が見られる。

圈足円面硯 (121・122)。121は脚部下端の破片、長方形の透し。ON34区 東西溝出土。

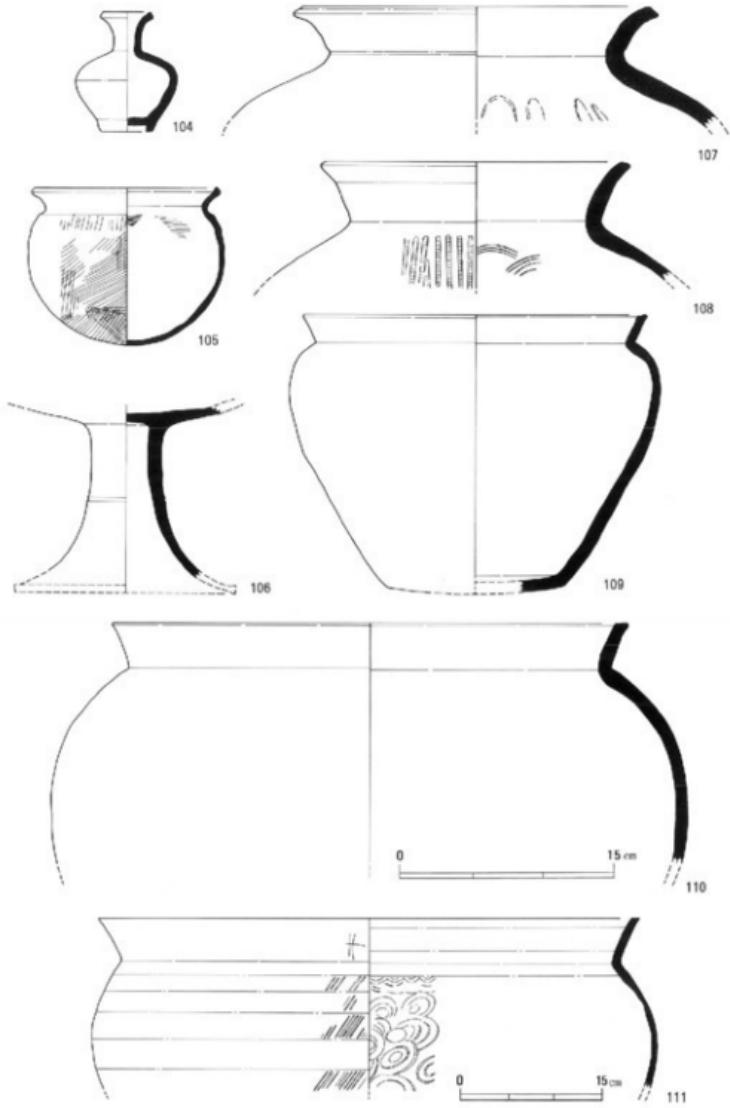


fig.18 土壤出土土器 2 (104-110 1 : 4 111 1 : 6)

122は脚柱部の破片、逆台形の透しを入れる。SK5769出土。

施釉陶器他 (fig. 19)

火舎状土器 (123 fig.21)

底部外面ロクロ削り、体部内外面はロクロなでとする。体部下半の破片のため全形は不明だが、上に向い徐々に径を縮小しており、壺Pの体部に似た形状に復原される。体部中位に2条の沈線と、2ヶ所に円形の透しがある。透し内には唐草状の簡単な文様が入るようだ。下半には貼花文の手法による草花文を飾る。草花文は、別につくった陰刻型で型取りした文様を貼り付けたもので、唐三彩の影響を受けたものと思われる。小さな黒色粒子を含む胎土で、外面の釉も黒色粒子が混じりごま塩状となる。猿投産と考えられる。

ミニチュア土器 壺A蓋 (125) 高い宝珠形鉢をもつ蓋。頂部上面に厚く濃緑色の釉がかかる。SB5763の西南隅柱掘形より出土。猿投窯の製品と推定。

二彩陶器 (124) 口縁部の破片、口径約36cmの大形の盤になるものと思われる。内外面ともに施釉する。銀化が著しく、白土部分は漆黒色に、緑釉部分は暗緑色に変色している。さわめて精良な胎土で、焼成は軟質。

不明土製品 (126 fig.20)

左右と上端は当初の面を残し、下端のみが折損の跡をとどめる。粘土板上に、粘土を盛り上げヘラで文様を作り出す。文様は金剛仏の宝冠などに類例を見ることができる。中央に3列で連なる円弧は葡萄の房を形象化したもので、その上には唐草が左右へそれぞれ3単位反転する。葡萄唐草文の変形した文様と考えられる。用途はまったく不明であるが、

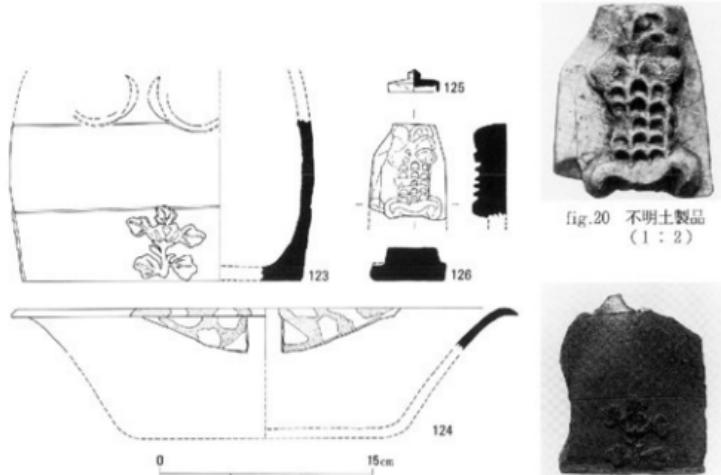


fig.19 施釉陶器他 (1 : 4)

fig.21 火舎状土器
(1 : 4)

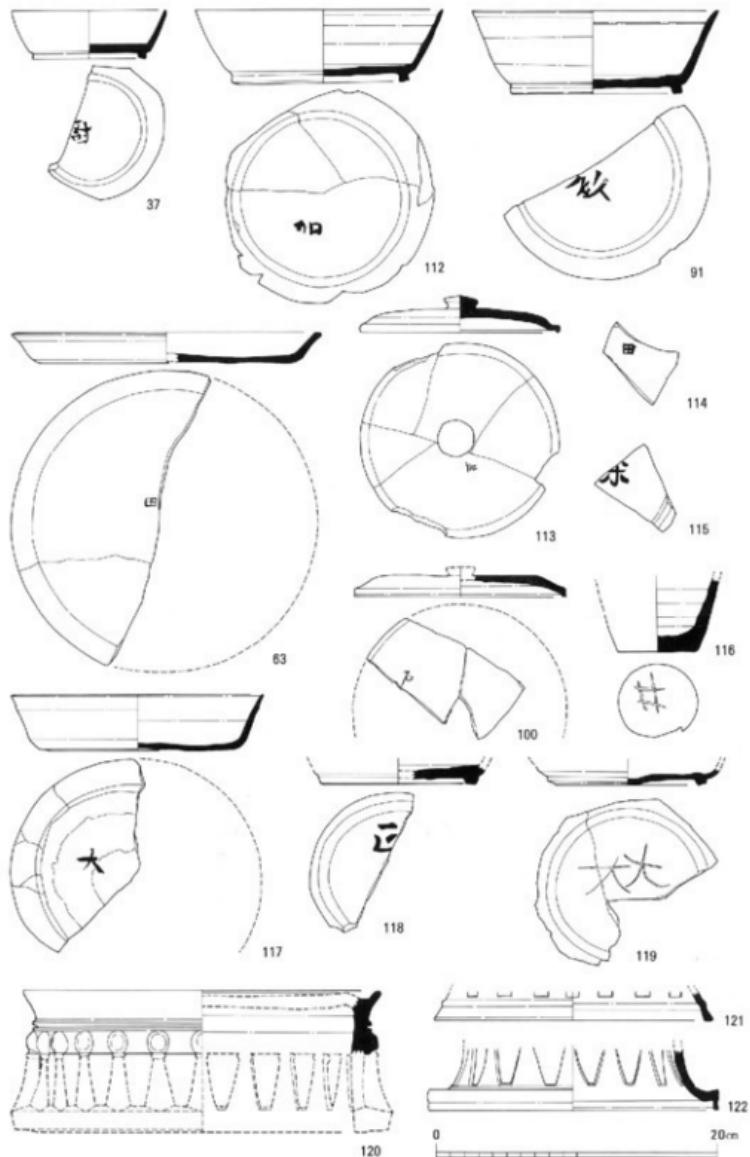


fig.22 横書き土器・硯 (1:4)

下面のみが破断面となるところから、ベースとなる板もしくは円帯状のものから立ち上がり、何らかの装飾的な用途を持っていたものと推定される。精良な胎土で、焼成は軟質。表面は黒色を呈する。瓦の焼成に類似する。

古墳時代土器 (fig. 26)

高杯 (127・128) 蓋付きの高杯。蓋127は頂部上面をロクロ削りとし、口縁部内外面をロクロなで、頂部内面はヨコナデとする。高杯128は杯部外面をロクロ削りとし、一条の沈線を入れる。3ヶ所にヘラ切りによる透しを入れる。
杯蓋 (129) 杯身 (130・131) 杯蓋では頂部外面をヘラ削りし、口縁部内外面はロクロなで、頂部内面はヨコナデ調整とする。杯身では底部外面をヘラ削りし、口縁部内外面はロクロなで、底部内面はヨコナデ調整とする。いずれも身受けと蓋受けの端部に一条の沈線がはいる。以上の高杯・杯蓋・杯身はいずれも黒色粒子が多く含む胎土で、焼成堅緻、灰色。
壺 (132) 口頸部を欠失する。体部上半は、カキ目調整。下半には細かな格子目タタキを部分的に残す。内面はヨコナデ調整、ナデ痕が顕著。肩部は降灰のため灰白色となる。砂粒の少ない胎土。焼成堅緻。底部に「十」の線刻がある。有蓋高杯と杯身 (131) は、6世紀前半代。杯のセット (129・130) は、6世紀中葉と考えられる。

まとめ

時期 既刊の『平城宮発掘調査報告』に従い、主要な遺構の上器の時期を、平城宮土器編年の中に位置づけておく。井戸出土土器では、SE5765出土土器は、杯Aに暗文がなく、底部から口縁部までをヘラ削りするc0手法によっており、平城宮土器編年IV期。ただし放射1段暗文のある土師器杯A口縁部破片が出土しており、井戸の構築は平城宮土器編年III期に遡る。SE5767出土土器は土師器皿Aがa0手法でラセン暗文+放射暗文をもつところから、平城宮土器編年III期に位置づけられる。土壤出土土器では、SK5769出土土器は、皿Aがa0手法で製作され、粗い放射状暗文を持つところから、平城宮土器編年III期の新段階頃と考えられる。SK5770出土土器は、杯Cがa0手法で調整されるとともに、杯C・皿Aとともに暗文がなく平城宮土器編年IV期もしくはV期に位置づけられよう。

特徴 今回検出した土器群の特徴として特記されることは、東海地方周辺の古窯産土器が多く含まれていることである。SK5769の火舎状土器、SK5774の杯B蓋、SB5763のミニチュア土器はV群土器、愛知県猿投窯産と推定される。SK5769の壺類、SK5773の壺は產地がはっきりしないが、東海地方あるいは北陸地方に窯を求めるかもしれない。特に数量的には後者の上器が目立つ。SK5769からは壺K・Qや壺A蓋をはじめとして、図示できなかった破片を含めると、かなりの量の出土がみられる。また器形では、杯皿類が少なく、SK5773から出土した壺をはじめとした貯蔵形態のみが出土しており注目される。さらに、計数処理を経た結果ではないが、土器を多く出土したSK5769と5770の2箇所の土壤からは、巨大な壺をはじめとする、貯蔵形態の出土が顕著である。



fig.23 SK5774出土土器



fig.24 SE5767出土土器



fig.25 SK5770出土土器

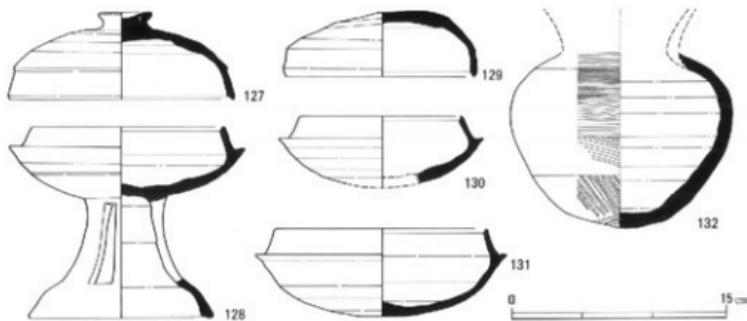


fig.26 古墳時代土器 (1 : 4)

2 瓦 塚

軒丸瓦 8点、軒平瓦 5点、丸瓦 674点、平瓦 2810点、塙 7点が出土した。1は6275Aで、高台瓦窯で生産され藤原宮から運ばれてきた瓦である。2は6282Bbで、瓦当裏面の接合粘土が多い。6282Bbは従来年代を新しく考えていたが、1988年の二条大路南側溝の発掘で木屑層から出土したものがあり、古く遡るかどうか検討を要する瓦である。3は6282Gで、6282B~Hの中では瓦当裏面の接合粘土が最も少ない瓦である。4は6313Aaで、小型の軒丸瓦。5は6691Aで、額に幅1.7cmの面をもつ曲線額である。6は6695Aで、直線額。7は6711Aで、直線額。6711Aは平城京羅城門跡での出土が知られる。6711Aの中には平瓦部凹面に横骨痕跡を残すものと残さないものとの両者があり、本例は横骨痕跡を残さない。8は6721Dで、額に幅1.5cmの面をもつ曲線額である。6721Dは後に範割れが生じるが、本例は範割れ以前のものである。他の軒丸瓦4点、軒平瓦1点については、型式を確定できない。

丸瓦は、総数674点66kg、平瓦は、総数2810点232kgである。3m方眼の中で丸平総計

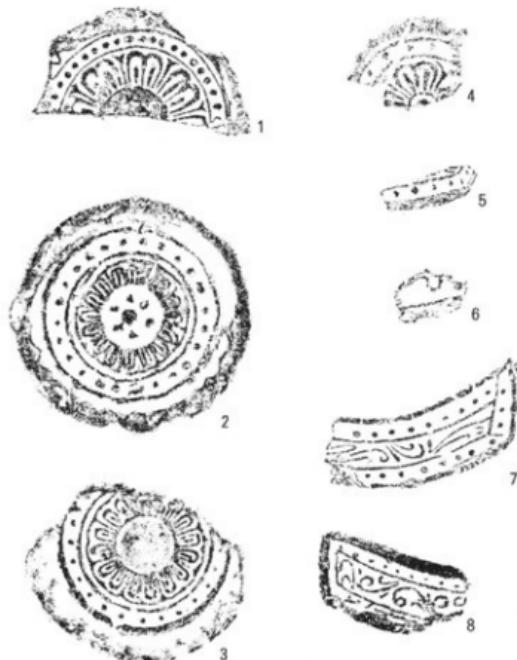


fig.27 軒瓦 (1 : 4)

10kg以上の瓦を出土したのは6区であり、いずれもSK5770、SK5769、SE5768、SE5767、SE5766、SE5764のように土壤又は井戸から出土した瓦が多く、総量の35%を占めている。したがって、同じ型式番号の瓦がそれぞれ1点づつしか出土していないことと考え併せて、発掘区内での瓦葺建物の存在は否定的にならざるをえない。なお、塙が7点出土しているが、OF区からON区の間で散漫に分布している。

3 木製品・石製品・金属製品

木製品 (fig. 28-30)

5基の井戸SE5764～5768からの出土品である。板状品・棒状品などを含め37点が出たが、小破片で原形の不明なもの、井戸棒の断片と思われるものなどを除き、25点のみを報告する。

斎串 (1・2) 祭祀具としては斎串2点が井戸SE5765埋土から出土している。1はヒノキの柾目薄板の上端を圭頭状に、下端を劍先状につくったもので、上端近くの両側縁に2ヶ所の切込みを入れる。奈良国立文化財研究所編『木器集成図録 近畿古代篇』(以下『木器集成図録』と省略)でC IV型式と分類されるものである。長14.5cm、幅1.8cm、厚さ1.9mm。2はスギ板目板製で、両側縁上端近く1ヶ所に切込みを持つC III型式のものである。長16.4cm、幅2.1cm、厚1.8mm。

尖端板 (3) 一端を劍先状に作り、形状は斎串に似るが、通常のものに比べてやや厚く、また剖面をそのまま残すことなどから斎串とは見做し難い。残長17.1cm。幅1.6cm、厚3.1mm。井戸SE5764曲物内出土。

木簡状木製品 (4)

いわゆる付札状木簡で、上下両端近くの両側縁に三角形の切込みを入れるもの。ただし、両端ともにその切込み部分で縱方向に折れる。ヒノキ柾目材で、表面には削り痕が明瞭に残る。ほぼ中央の一側縁に1ヶ所、他の側縁に2ヶ所、紐の当たりかと思われる凹みが認められる。墨痕が見られないことから、文字を削りとった後に破棄されたものであろう。長25.9cm、幅3.0cm、厚6.7mm。

尖端棒 (5-7) 井戸SE5768枠内から3点を検出した。5・6はヒノキ製、7はスギ製で、いずれも一端を削り出し、尖端状に整える。長さは5が24.1cm、6が29.6cm、7が31.5cm。

丸棒 (8) ヒノキの削材からつくる断面円形の棒。残長22.3cm、径1.6cm。井戸SE5768掘形出土。

箸 (9・10) 箸と思われる棒状品が井戸SE5765埋土から2点出土している。

いずれもヒノキの木片を小割りにしたのち、棒状に整形したものである。9は断面隅丸方形で長18.6cm。10は断面長円形で長15.3cm。

角棒 (11) ヒノキ削材からつくる角棒。先端をやや細く整える。

残長9.3cm。井戸SE5765出土。

横櫛 (12) 『木器集成図録』にA II式と分類される横櫛の断片。1cmあたり11～12本の歯を挽き出している。イスノキ製。SE5765枠内出土。

薬壺 (13) 扁球形の体部に直立する短い口縁をつくり出す。下半を欠損しているため底部の形状は不明。漆をかけない白木作りである。ヒイラギ材の横木取り。腹径5.8cm、口径3.3cm。器壁の厚さは一様ではないが、4mm前後である。SE5765掘形出土。

円形曲物底板 (15-18) 計4点。いずれもヒノキ柾目板製。

15・16・18の3点はSE5767埋土上出上で、15には4ヶ所、16には3ヶ所の木釘孔が残る。15は直径16.1cm、厚7.0mm。16は直径16.7cm、厚7.0mm。18は全体のほぼ半分の断片で、腐食が進行し釘穴の有無も判然としない。復原径16.9cm、厚6.9mm。17はSE5768枠内出土で、一面に黒漆をかける。同時に出土した側板断片にも湾曲する内面に黒漆が認められることから、漆は曲物容器内面に塗

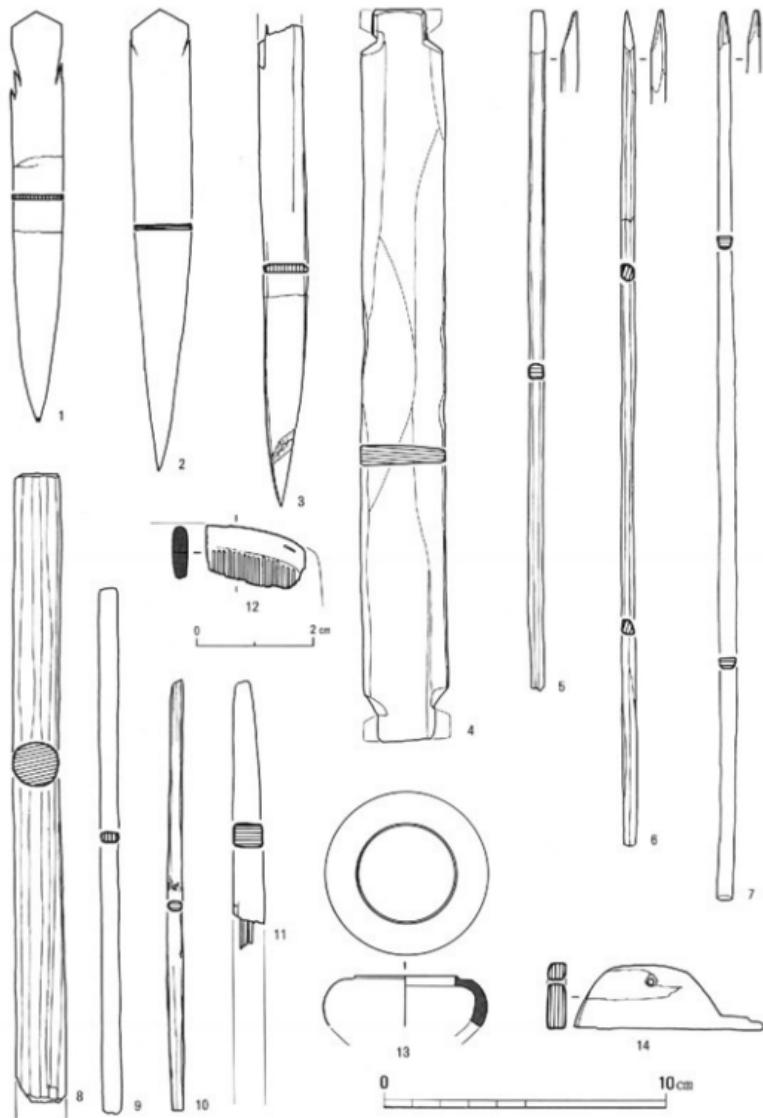


fig.28 木製品1 (1:2、12は1:1)

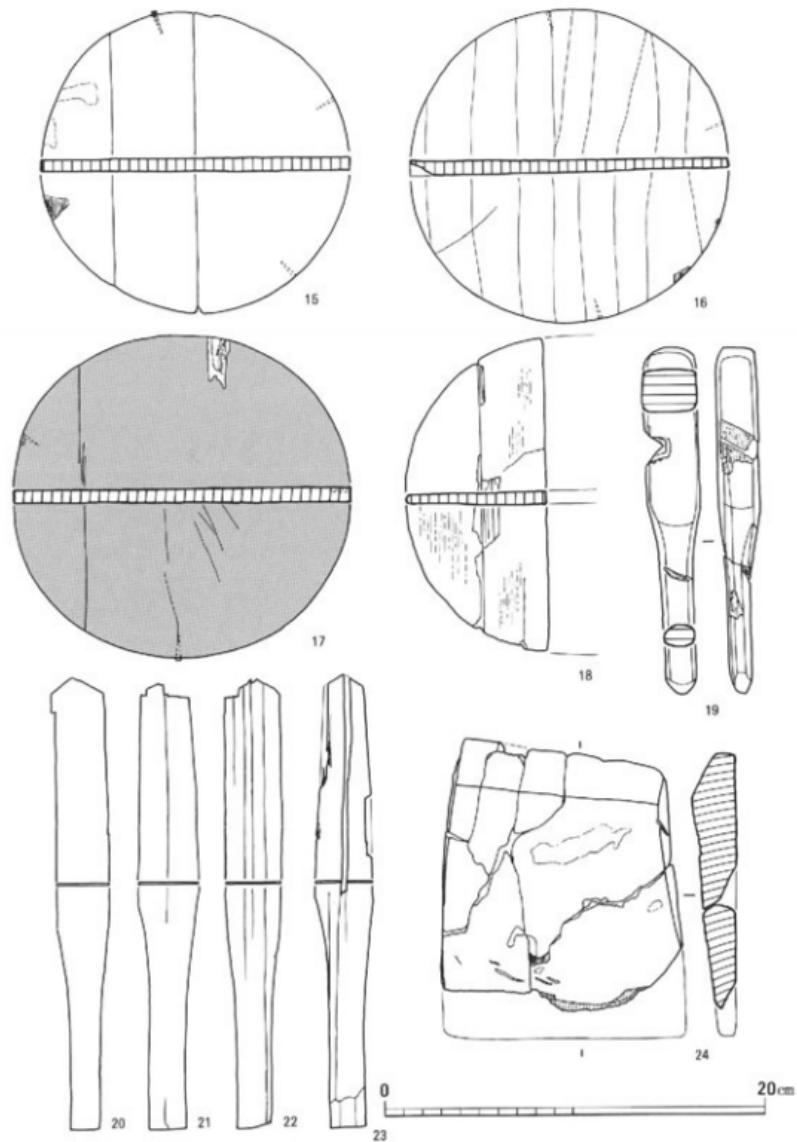
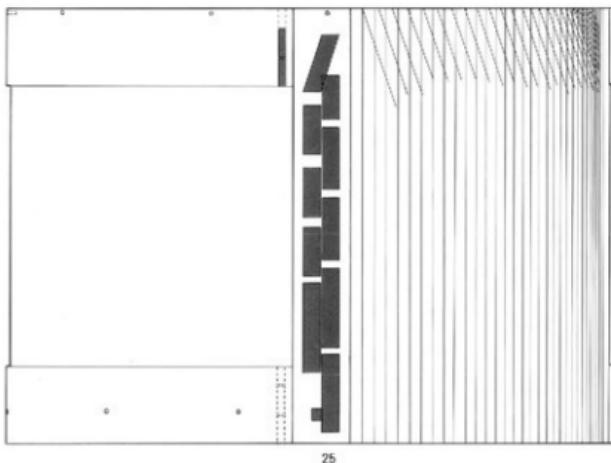


fig.29 木製品 2 (1 : 3)

られていたことが判る。木釘孔が3ヶ所あり、うち1ヶ所には木釘が残存する。直径17.7cm、厚7.6mm。
工具柄 (19) アカガシ亜属の割材からつくる何らかの工具の柄。握り部分を細く削り出し、上半分を隅丸方形に整え、その一面に斜め方向の溝状の切欠きを入れる。縄などをかけるためのものか。用途は不明。長18.4cm。
檜扇未製品 (20-23) SE5765埋土から4点が一括して出土した。いずれもヒノキの薄板で、圭頭状を呈し、ほぼ中央で最大幅を持ち、本を細くしており、形状は檜扇に似る。ただし、厚さが約1mmと薄すぎること、そして要の部分に孔も切欠きもなく、束ねることが不可能なことなどから扇の完成品とは考えられない。失敗作でもあろうか。長さはいずれも24.0cm前後。幅は2.7~3.2cm。
円形曲物 (25-27) 井戸SE5764・5768の俗に目玉と呼ばれる下枠に使用されていた円形曲物が3点出土した。25は井戸SE5764に用いられていたもので、直径42.6cm、高31.9cm。側板の上下縁に縦をはめる。いずれも1列外3段綴じ（綴じ方の呼



25

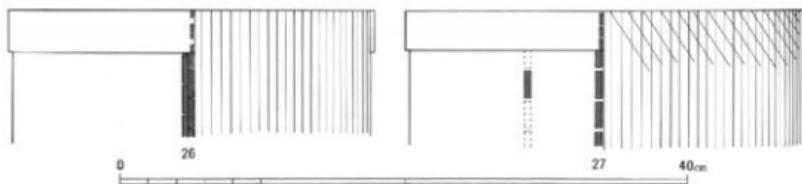


fig.30 曲物 (1 : 4)



fig.31 石製品・金属製品 (2 : 3)

称は『木器集成図録』の分類に拠る)。上縁は13カ所で、下縁は8カ所で木釘どめ。側板の継ぎ合せは1カ所で、2列前内5段後内5段。内面には縦平行線のケビキを約8mm間隔でいれる。26・27は井戸SE5768の下枠として使用されていたもの。26は下段で、下部を欠損する。直径26.2cm。上縁には縫をはめ、1列外3段継じ。側板の継ぎ合せは1カ所で、2列前内4段以上後内3段以上。内面には縦平行線のケビキを約7mm間隔でいれる。27は上段で、やはり下半部を欠く。直径は28.3cm。上縁には縫をはめ、1列内3段継じ。側板の継ぎ合せは1カ所で、2列前内4段以上後内4段以上。内面には約7mm間隔の縦平行線のケビキと、約1cm間隔の斜平行線のケビキをいれる。用途不明品(14・24) 14はヒノキ柾目板の小片を半円形に整え、つまみ状の作り出しをこしらえたもの。身の部分の中央に一孔を穿つ。SE5765出土。24はクリの柾目板をクサビ状に一端を薄く整形したもの。腐食が著しく、使用痕等は不明瞭である。残長15.8cm。幅12.5cm。厚2.3cm。SE5768掘形出土。

石製品・金属製品 (fig. 31)

砥石 (1・2) いずれも石英斑岩ないしは花崗斑岩製である。断面不整方形で、長軸方向の4面を使用する。1は小型の砥石で、長5.3cm、幅3.7cm、厚3.0cmを測る。一側縁が研ぎ減りて若干内凹する。SK5769出土。2はやや大型で、長7.2cm、幅5.0cm、厚6.0cmである。長軸方向の4面および下端面を使用しており、各面に研ぎ傷が残る。上下両面、左右両面とともに非対称に研ぎ減る。SB5752北側の土壤出土。 鉄釘 (4-7) 鉄釘は計4点出土している。4~6は折頭釘である。上端を叩きのばし、ほぼ直角に曲げて釘頭としたものである。4のみが完形で、長9.0cm。残りの2点は下端を折損しており、それぞれの残長は6.4cmと4.3cmである。銹化のあまり進んでいないものについては表面観察によって、また銹化の進んだものについては折断面の観察から、脚の断面はいずれもほぼ正方形を呈することが判る。出土地点は4がSE5765埋上、5はOO32区黄褐色粘土、6はSB5757内の小穴。方頭釘としては、7の1点のみが出土した。銹化が著しいが、折断面の観察から、脚の断面は正方形。残長1.4cm。SE5765掘形出土。 丸鞘 (8) 帯金具丸鞘の表金具で、ほぼ光形品。内面の二隅に鉄足を鋲出している。銹化がすすみ、保存状態は良くない。本来、表面に漆が塗られていたかどうかも不明。高2.0cm、幅3.0cm、厚4.0mm。SK5770出土。 不明鉄製品 (3) SB5753庶西邊の柱穴から出土した断面長方形の棒状品で、長9.5cm。偏平な面の一端に突起があり、もう一端には、それと直交する面に突起がつく。突起の位置から見てかすがいとは考えられない。何らかの工具の軸部であろうか。不明青銅製品 (9) 瓜実を縦横に四分割した形状をとる小型の青銅製品。外面の中央に円錐台状の突起がつく。外面上には縦方向に4条の溝状のくぼみがあるのにに対して、内面は平滑。高2.6cm、幅2.3cm、厚2.0cm。SE5764棒内出土。

IV 考 察

1 条坊と遺構の占地

本調査区は左京三条一坊七坪のほぼ中央部に位置するが、発掘調査で見つかった各遺構が七坪の区画に対してどのような位置にあたるのかを検討するために、はじめに七坪四周の条坊の復原を行い、つぎに道路・建物等との位置関係を検討したい (fig.33 参照)。

まず、南北方向の条坊であるが、七坪は東を東一坊坊間路、西を東一坊坊間西小路に面する。東一坊坊間路に関連する遺構は3ヶ所で見つかっている。①平城宮南面東門（壬生門、平城宮跡第122次調査）、②当該七坪位置における西側溝（奈良市1983年度調査）、③左京七条一坊十一坪位置における東側溝（奈良市1983年度調査）、である。②の西側溝と③の東側溝の調査地が2.5kmも離れているために、東一坊坊間路の幅員を遺構から直接に確認することはできないが、壬生門の中心が東一坊坊間路の中軸線上にあり、かつ、東一坊坊間路の国上方眼方位に対する振れが朱雀大路調査（奈良市、1974年）で確認した北で西に15分41秒であると仮定すると、②の位置では東西両側溝心々で21.3m、③の位置では21.9mとなる。両者の数値が近似することから、この推定が妥当性を持つものと考えて東一坊坊間路の位置を復原した。

東一坊坊間西小路に関連する遺構としては当該坪西側で同小路西側溝とおぼしき溝が見つかっているが、この溝は前述の東一坊坊間路の推定位置、および、朱雀大路推定位置から復原される同小路西側溝の位置に対して約6.3mも西に寄った位置にあり、西側溝と断定することができない。したがって、ここでは東一坊坊間路の推定位臓と朱雀大路推定位臓の中点に東一坊坊間西小路があるものと推定しておく。

つぎに東西方向の条坊であるが、七坪は南を三条条間路、北を三条条間北小路に面する。三条条間路の遺構は見つかっていないが、三条条間北小路の遺構は朱雀大路に面する左京三条一坊一・二坪間で見つかっている（奈良市1986年調査）。ここで確認された小路心を東へ延長し、三条条間北小路の位置を求め、三条条間路もこの小路の南450小尺の位置に平行すると仮定して復原した。条坊の振れは南北方向で採用した15分41秒を用いた。

このようにして復原した結果がfig.32である。南北道路SF5776、東西道路SF5777とともに七坪の中軸線近くにあるものの、それぞれわずかにずれる。南北道路は中軸線に対して西へ約7mの位置にあり、東西道路は中軸線に対して南へ、同じく約7mの位置にある。また、南北道路の幅員が3.6m（側溝心心間距離、約10大尺）であるのに対して、東西道路はその倍、7.2m（約20大尺）となっている。このような規格性から見ても、両道路は同時に存在した一連のものと考えられる。南北道路の東側、東西道路の北側で側溝が途切れたような状況であるから、両道路は坪の中央付近で鍵の手に折れていたのであろう。これらのこととは両道路の東側、および北側の区画をより広く確保しようとした結果を見るこ

ともできよう。A期の正殿と考えられるSB5758と東西道路が位置をそろえることなども、両道路が坪を細分するものではなく、七坪内の一体的な地割りにもとづく施設であることを示しているのであろう。

七坪内における正殿推定建物の位置であるが、A期の正殿 SB5758は前述のように道路の東側にあり、南北中軸線の東約18mに西妻、東西中軸線の南約4mの北側柱筋がくる。一方、B期の正殿SB5753は西妻を南北中軸線に合わせ、南側柱筋は東西中軸線の北約2mという坪の中軸線をもとに地割りしたとも言える配置をとっている。

tab. 2 関連条坊座標一覧表

点	条坊道路	種別	X 座標	Y 座標	備考
1	二条人路	条坊計画線	-146,019.36	-18,586.21	朱雀門心（第16次調査）から70大尺南の点
2	壬生門	門心	-145,994.10	-18,318.60	第122次調査実測図
3	東一坊坊間路	西側溝心	-146,260.10	-18,328.04	奈良市昭和58年度調査概報
4	"	東側溝心	-148,447.50	-18,296.46	"
5	三条条間北小路	北側溝心	-146,148.63	-18,541.00	奈良市昭和61年度調査概報
6	"	南側溝心	-146,155.41	-18,541.00	"
7	"	小路心	-146,152.02	-18,541.00	"

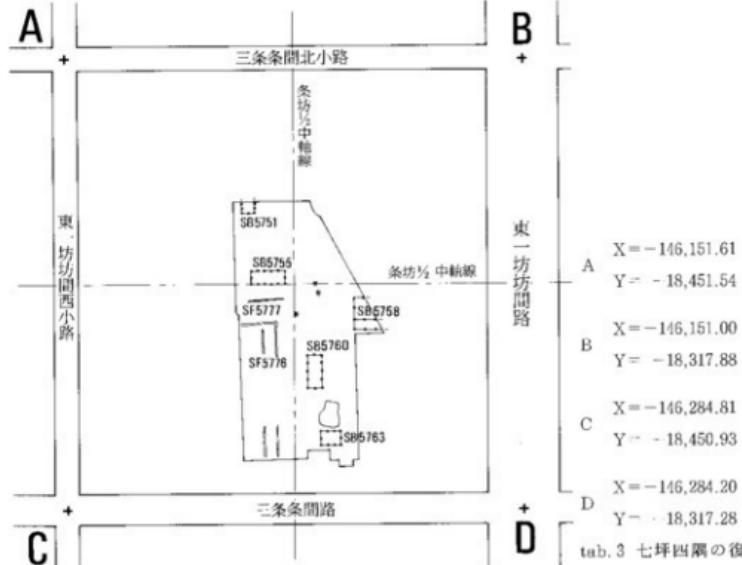


fig.32 七坪遺構配図

原条坊座標値

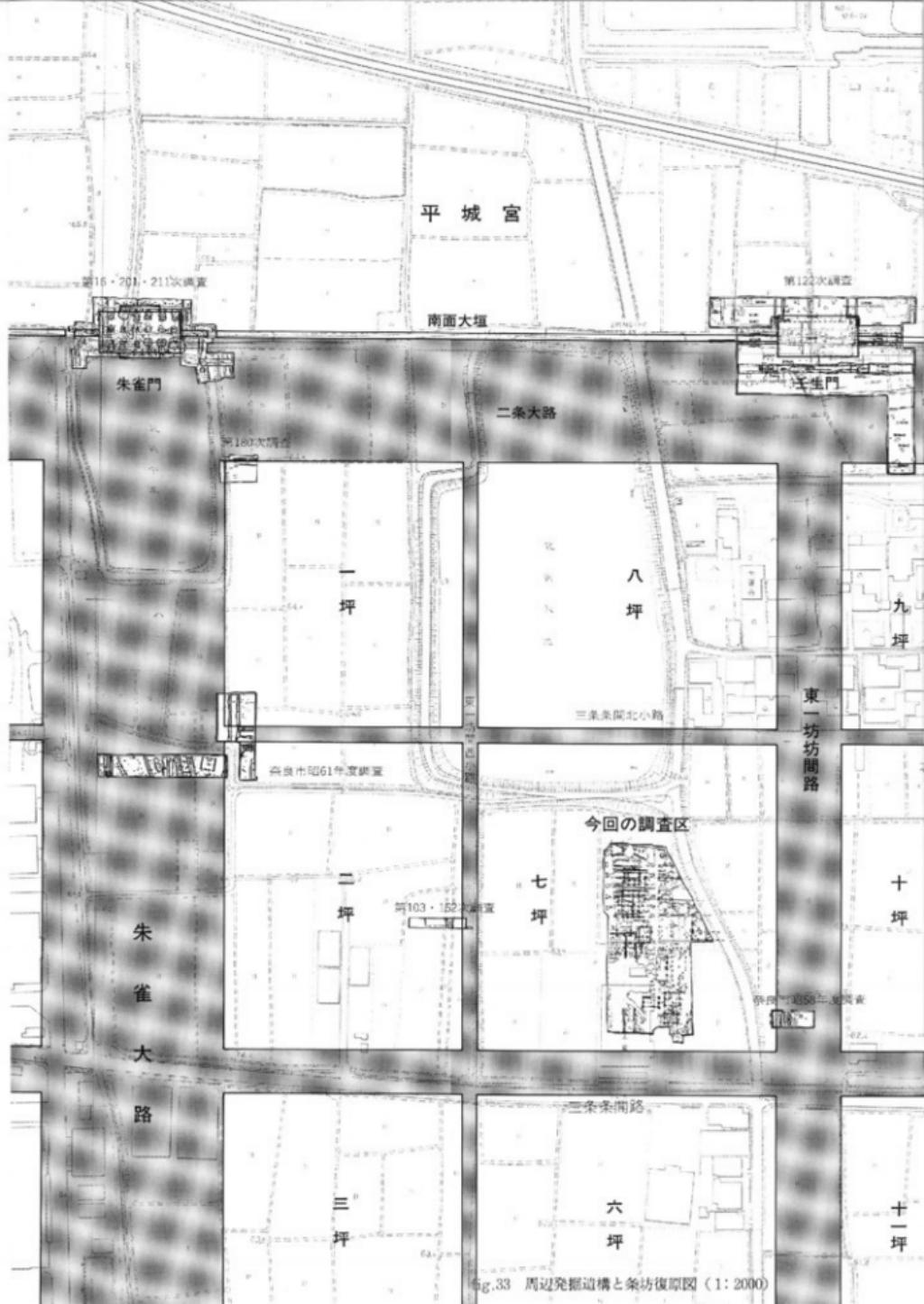


Fig.33 周辺発掘遺構と条坊復原図 (1:2000)

2 遺構の変遷と性格

遺構の変遷

奈良時代前半の遺構としては、掘立柱建物 SB5759が確認されたのみだが、のこりの12棟の建築遺構や道路・溝などの主要な検出遺構は、いずれも奈良時代後半に建てられたものと推定される。これらの主要遺構は、重複関係・配置関係・出土遺物などから、以下に示すような A・B の2期にわたる変遷をとげたものと思われる。

A期 奈良時代後半の前期。東西棟 SB5758を正殿とし、南北棟 SB5760を西の脇殿とする。この両殿の西北に散在する遺構では、SB5751・5755・5759、南側の遺構では SB5763 がこの時期に属す附属舎である。建築以外では、道路 SF5776・5777がこの時期の敷地内道路と考えられる。また、井戸 SE5765・5766・5767は A期の井戸、大土壙 SK5769は A期から B期へ移行していく過程において、不要となった道具をすべてごみ捨て穴とみなせよう。

B期 奈良時代後半の後期。東西棟 SB5753を正殿とし、南北棟 SB5752・5754、東西棟 SB5756・5757の4棟を西側の脇殿群として配する。SB5756をのぞくこの時期の正殿およ

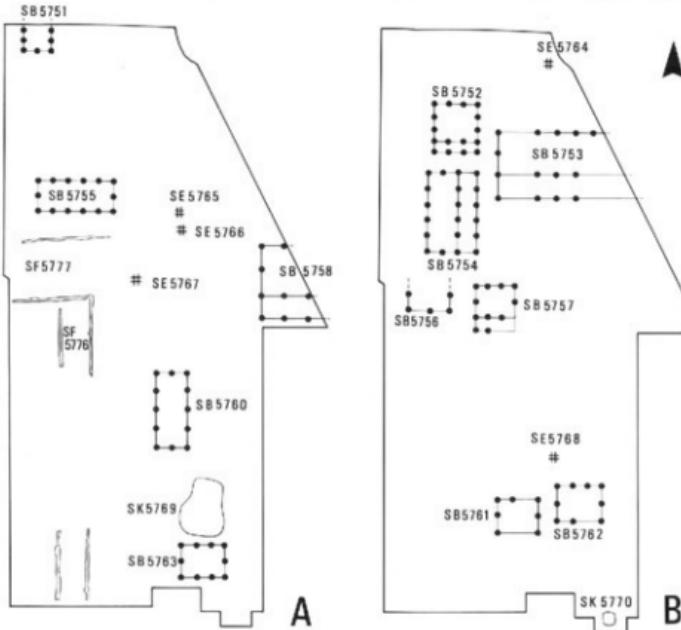


fig.34 遺構変遷図

び3棟の脇殿は、いずれも正面側に庇をともない、しかも庇の出が身舎梁行柱間よりもない、という共通点がある。この中心建築群からやや離れた南側には、庇のつかない3間×2間の東西棟SB5761・5762という2棟の附属舎を設ける。建築以外では、底に曲物をとする井戸SE5764・5768、帶金具の出土した上壙SK5770がこの時期に属する。

遺構の性格

当該地は、平城宮朱雀門の門前ともいえる平城京の一等地である。しかし、発掘調査によって出土した遺構は、その一等地としての特性を必ずしも反映するものではなかった。むしろ、一等地としての期待をいくぶん裏切るものであったという表現のほうが適切かもしれない。その理由は、近隣の条坊との比較によって、より鮮明にえがきだされよう。とりあえず、長屋王邸宅と比較するのがてっきり早い。当該地に隣接し、同じ平城京の一等地とはいえ、いくぶん平城宮から離れた左京三条二坊一・二・七・八坪に広大な屋敷をかまえる長屋王の邸宅跡では、周知のように、規模の大きな掘立柱建物が濃い密度で配置され、建替えも頻繁におこなわれてきた事実が確認されている。それに対して、本発掘区でみつかった13棟の建物は、SB5753・5758というA・B両期の正殿をのぞくと、平面規模・柱穴とともに規模がはなはだ小さい。また、総数わずか13棟という棟数が意図的に示すように、建築遺構の分布密度はきわめて希薄で、建替えもわずか2時期しかおこなわれていない。

以上の対比的状況からして、当該地が長屋王に匹敵するような上級貴族の邸宅であった可能性はほとんどない、といえよう。要するに、上級貴族がかように貧弱な住宅に住んでいたはずはないのである。

とすれば、用途比定の選択肢として残されるのは、中下級階層の貴族住宅か官衙的施設かのどちらか、ということになる。しかし、前者とは考えにくい。朱雀門門前の広大な一等地に、地位の低い貴族が単独で屋敷をかまえることなど、ありえないからである。

したがって、本発掘区の遺構は、官衙的施設とみるのが最も妥当であろうと思われる。ただし、官衙とはいっても、平城宮内で近年発掘されている式部省・兵部省などの遺構とくらべれば、その建築的施設はあまりにも貧相であり、ランクとしては二官八省とはいさか隔たりのある、中級以下の役所であったとみなさなければなるまい。

さて、当該地は、平安京においては「人学寮」が、唐の長安城においても大学寮に相当する「国子監」がおかれた区画であることが知られ、本発掘区においても「大」と記された墨書きと、下級役人が身につける銅製帶金具が出土しており、ここが平城京の大学寮であった可能性がある。もちろん以上の発掘資料のみから、この一画を大学寮と断定することはできないが、また、それを完全に否定することができないのも事実であろう。

これについて、遺構の面からも若干の検討をくわえておきたい。まず、本発掘区の遺構は、上述のように、さほどランクの高くない官衙的施設であった可能性が大きく、それは、中下級官人養成のための大学寮の地位・性格と矛盾するものではない。

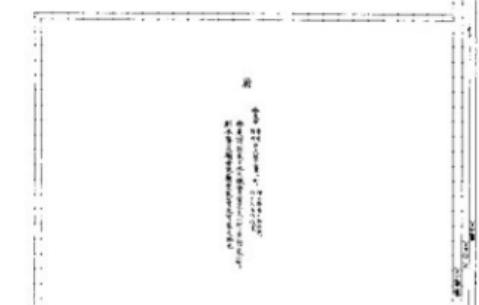
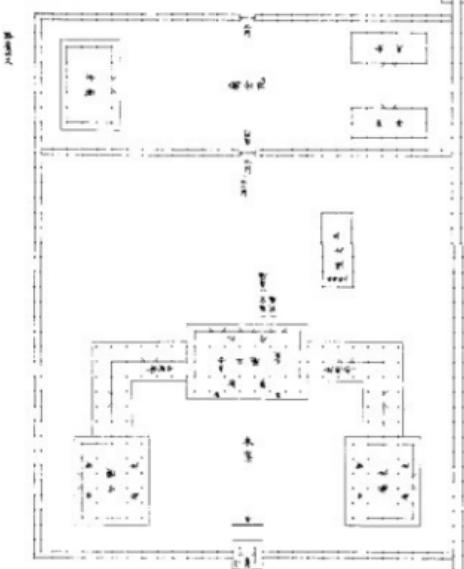
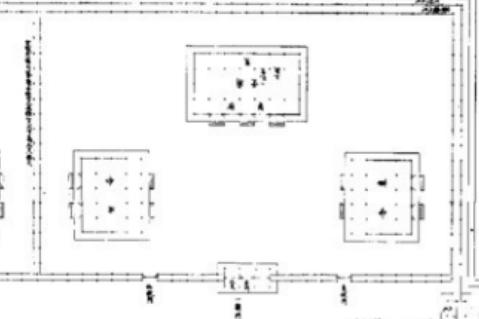
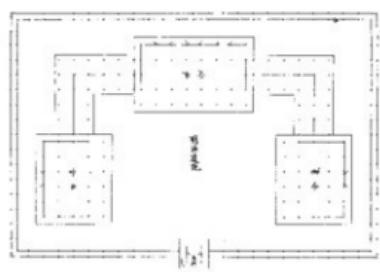
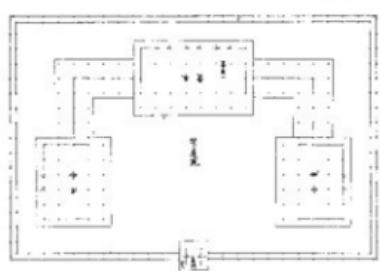
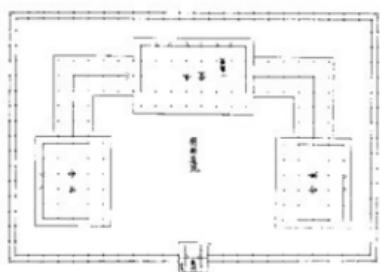
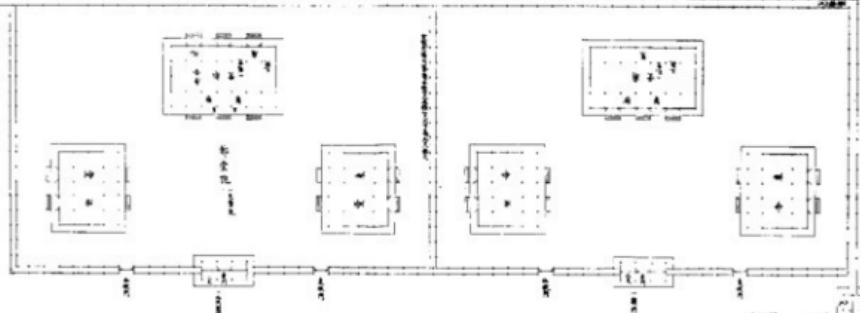
つぎに、建築配置についてだが、天保十一年（1840）刊の内藤廣前『大内裏図』にふくまれる「大学寮図」と比較してみたい。この指図は、裏松固禪の『大内裏図考証』（1797）などにもとづき、平安京大学寮の全体平面を復原したものである。北は二条大路、南は三条坊門小路、東は壬生大路、西は朱雀大路にかこまれた4町を敷地とし、東西に3等分した東側の2ブロックをさらに小規模の了院にわけ、主要殿舎を集中配分している。殿舎配置は、いずれも正殿と両側の脇殿が対称コ字形に配されたもので、「本寮」・「明経堂院」・「算道院」・「明法道院」では正殿と両脇殿を翼廊風の回廊でつなぐが、北側の「都堂院」・「廟」では回廊をもうけない。

一方、本発掘区の場合、A・B両期とともに、中心施設群の西半が検出されたのみで、正確な配置が確認されたわけではないが、正殿と脇殿が対称コ字形配置をとっている可能性は十分ある。ただし、回廊状の遺構はまったく認められなかった。また、A・B両期とも、中心施設群の南側に、大量の土器をともなう大きな上廻と雜舍群が存在し、厨房的機能をもつ領域とも推定されるが、この配置は「大学寮図」における「本寮」と「厨」の位置関係に対応しているという見方も可能であろう。

以上のように、本発掘区の遺構は、大学寮の地位・性格と対応し、中心施設群の配置および中心施設群と「厨」との位置関係に、「大学寮図」との類似性がみいだされる。もちろん、回廊の有無・建物本体の平面・築地塀の有無など、「大学寮図」とは異なる点もすくなくないが、この復原図の対象が平安京大学寮であることや、考証そのものが決定的ではないことなどを斟酌する必要があろう。

結論をまとめるならば、本発掘区の遺構は、とりあえず「大学寮」であるための必要条件を満たしたものと位置づけてさしつかえなかろう。もっとも、それはけっして十分条件ではない。大学寮とはほぼ同じランクの、べつの役所である可能性も十分残されているのである。





3 史料からみた平城京の宮外官衙

IV-2で述べたように、本遺跡の遺構は密度も低く、また建て替えも頻繁ではない。貴族の邸宅とすれば、宮前面（南辺）の一等地という場所からみて、長屋王（左京三条二坊一・二・七・八坪に居住）と同等もしくはそれ以上の住人を考えるのが自然であるが、遺構はそのような想定を行なうには貧弱と言わざるを得ない。むしろそれほど格の高くない官衙を想定するのが無難であろう。2時期とも正殿と脇殿風の建物で南に開くコの字型の建物配置をとると想定される点も、そのような推定に有利である。

一方、墨書き器の内容からもここは官衙である可能性が高い。最も注目すべきは大上塙SK5769から出土した「厨」と書かれた墨書き器である。南部の井戸SE5768出土の「米」や南端の方形上塙SK5770出土の「飯」もこれと一連の内容で、調査区南端部は、SK5769出土の大量の土器がそれを示すような食物の貯蔵、および調理を行なう厨の空間が広がっていたとみられる。

「厨」ないし「某厨」と記す墨書き土器は全国的にはけっして珍しくはないが、郡家など地方官衙に関わると考えられるものが多い。平城京内出土の墨書き土器の事例としては、左京一条二坊一坪から「官厨」3点、左京三条二坊八坪北側の二条大路上に掘られた溝状土壤SD5100から「中衛府厨」「中衛厨」各1点、「厨」1点などがある。官厨は太政官の厨

tab.4 半城宮・京出土「蔚」銘墨青土器一覽

*山典監のI、IIは、奈良國立文化財研究所『平城宮出土書畫土器集成』I、『同』IIを、また、*は奈良國立文化財研究所『平城京後宮王御宅と本施』(1991年1月、吉川弘文館刊)付表2 墓出土器 監を示す。

を指すとみられ、またSD5100出土の木簡群（SD5300、SD5310の木簡群とともに二条大路木簡と総称）には官衙的色彩が強く、平城京内においても「厨」は官衙に関わるとみてよいであろう。

ちなみに、平城宮内からは多数の「厨」の銘のある墨書き土器が出土している。「兵厨」「兵部厨」（以上、兵部省の厨）「民厨」（民部省の厨）「中厨」（中務省の厨）「女嬌厨」（後宮十二司の厨）など官司名を明記するものもあるが、単に「厨」とするのが一般的である。他官司と食器を共用することが少なかったためであろうか。なお、奈良時代後半の兵部省や式部省の全容は既に発掘調査で明らかになっているが、そこには厨に相当する空間や井戸がないことがわかっている。「兵厨」などが実際にどこにあったかは残された大きな課題となっている。

さて、本遺跡が宮外に置かれた何らかの官衙であるとする、具体的にいかなる官衙が想定されようか。そこで次に、平城宮外にあった中央官衙（以下、宮外官衙と称する）を整理しておくことにしたい。

〈1〉 役所の性格からみて宮外官衙と想定されるもの

左右京職 左右京の行政をつかさどる役所である。左京職は左京に、右京職は右京にあつたとみてよい。藤原京では出土木簡などから右京七条一坊西北坪（平城京では宮南面の右京三条一坊八坪にあたる場所）を右京職とみる見解があり、平安京では左京職は左京三条一坊一町、右京職は右京三条一坊三町を占めていた。平城京では不明とせざるを得ないが、左京五条二坊十四坪で見つかったコの字型配溝をとる一坪占地の遺構（但し、奈良時代後半）を左京職に充てる見解もある。

東西市司 東西市を管理する役所で、東市司は左京職の、西市司は右京職のそれぞれ被管である。東市は左京八条二坊五・六・十一・十二坪、西市は右京八条二坊五・六・十一・十二坪にあったことがほぼ確実で、市司もその区画内、ないしその近辺にあつたとみてよい。なお、平安京の東市は左京七条二坊三・四・五・六町、西市は右京七条二坊一・四・五・六町にあり、それぞれ周囲に八町分の市町が付属していた。平城京では市町が存在したという明証はない。

〈2〉 文献史料から推定される宮外官衙

皇后宮職 皇后付きの家政機関に相当する役所である。『続日本紀』天平2年正月辛丑(16日)条に「晚頭皇后宮に移り幸す。」とあり、「幸」は天皇が宮城外の施設へ出る際の表記であるから、ここに見える聖武天皇の皇后光明子の皇后宮は宮外にあったことがわかる。具体的には、『続日本紀』天平17年5月戊辰(11日)条に見える光明子の旧皇后宮を宮寺（法華寺）に改めたとの記事から、法華寺の地に比定できよう。従って、その事務をとる機関である皇后宮職もその近辺における所在が想定される。なお、宮寺への建て替え後の皇后宮の所在は不明であり、従って皇后宮職の位置も不明とせざるを得ない。

なお、第129次調査で宮東半部の基幹排水路 SD2700から皇后宮職少属川原藏凡の名が

見える墨書き器が出土している（奈良国立文化財研究所『平城宮出土墨書き器集成』II、522⁽¹⁾号）。これは受け取った木筒や文書を見ながら書いた習作と考えられ、SD2700北端の宮北部には皇后宮職ではなく、後宮関係の役所を想定すべきであろう。

大学寮 役人の養成機関で、式部省の被管である。上級貴族は蔭位による出身が可能であり、主として下級貴族の子弟の養成機関として機能した。平安時代にみられるような明經・算・明法・文章の4つの学科が整備されるのは天平の初めであり、大学における重要な儀式である积奠が整備されるのも奈良時代中葉以降である。

その所在地については、「続日本紀」神護景雲元年2月丁亥(7日)条に、「大学に幸して駁築す。」とみえ、「幸」とあるから宮外にあったことは確実である。また、第133次調査で平城宮南面西門（平城宮でも若犬養門と称した可能性が高い）外側の二条大路北側溝SD1250から出土した次の木簡（fig.36）も、大学寮の位置を推定する手がかりとなる。

『平城宮発掘調査出土木簡概報』15、1982年5月、16頁）
これは、公子部牛生なる人物が、盜まれた馬の探索を依頼する木簡である。完存しているにも拘らず下端まで文字が書かれており、また何よりも裏面まで記載が続く点でいわゆる告知札とはや異なり、大学寮宛の文書木簡とみるのが妥当であろう（但し、その後の掲示を意図した可能性までは捨てきれない）。ここで注目すべきは、探索を依頼する宛先が大学の学生と官人であるという点である。坪内の遺物ではないので位置を特定するための厳密な根拠とはならないが、この近辺に大学寮があったとみて認りあるまい。

平安宮の大学寮は宮外の左京三条一坊西北部にあったことが知られており、これは府長安城の務本坊にある国子監（日本古代の大学寮に相当する教育行政機関）の位置とほぼ対応する。そこで、平城宮の大学寮の位置についても、長安城の位置を踏襲したものとみて左京三条一坊七・八坪に充てる見解が出されている。¹¹¹⁾

一方、これと朱雀大路をはさんで対称の位置にあたる右京三条坊に充てる見解もある。⁽¹²⁾ 上に述べた馬の探索を求める木簡が、宮南面西門付



fig.36 第133次
調査出土木簡
(1:4)

近から出土したことがその主な根拠であり、その場合平安京では穀倉院を右京二条一坊に置いたため、大学寮をこれと対称の位置の左京二条一坊の地に移したと考えることができ⁽¹³⁾る。

二条大路北側溝 SD1250は朱雀門の前で一旦途切れるので、この木簡が左京三条一坊北側の壬生門付近から西へ流れてきたとは考えられない。従って、廃棄場所の近傍に大学寮を考えると、右京説にやや有利ともいえそうである。しかし、平安京の大学町（右京二条二坊六町）と大学寮の位置関係が平城京においても当てはまるすれば、通勤・通学途上に掲示したとみることもでき、また長安城から半城宮、平安宮へという流れからみると、平城京において大学寮を散えて右京に移した積極的な根拠は見あたらないので、文献史料からは左京か右京か断定する決め手はないと考えるのが穩当であろう。

大蔵省 諸国から送られてくる調、及び布・綿など輸貨の庸の保管・管理にあたった役所で、その曹司及び倉院は、平城宮の北方、松林苑との間にあった。『続日本紀』宝亀3年6月己卯(30日)条や同宝亀7年9月甲戌(20日)条に「大蔵省に幸して」云々とあるので、宮外官衙の一つとしてよい。なお、平安宮においては、宮が平城宮より北へ二町分拡張されているので、ほぼ同位間に立地する大蔵省は宮内に取り込まれている。

喪儀司 壑葬及びその用具の保管・管理にあたる役所で、『西大寺資財流記帳』の記載から、西大寺の東北隅の右京二条三坊一坪にあったことが知られている。恐らく西大寺造営以前からの占地であろう。

太政官厨家 平城宮におけるその実態は明らかではないが、左京三条二坊一坪（旧長屋上邸西北隅の坪）から「官厨」と記された墨書き土器が3点出土しており（tab. 4 参照）、奈良時代後半にこの地に太政官厨家が営まれたことが推定される。なお、長岡京の太政官厨家は出土木簡から左京二条二坊六町にあったことが推定されており、また平安京では左京二条二坊五町にあったことが知られている。

民部省庫院 米・塩などの重貨の庸の保管・管理にあたった民部省の倉である。平安宮では宮東南隅近く、民部省の東にあったことが知られているが、平城宮では民部外司とみえる官衙がこれに相当し、宮内にある民部省に対し、京内にあるために「外」の呼称を付して呼んだのである。その位置については、『続日本紀』天平17年5月乙亥(18日)条に見える「松林倉廩」、同天平神護2年2月丙午(20日)条に見える「松原倉」をこれに充て、平城宮北方に推定する見解がある。

式部省外曹司 平城宮南面大垣北雨落溝 SD4100から出土した墨書き土器に「式部外曹司進」と記したものがある（奈良國立文化財研究所『平城宮出土墨書き土器集成』I、801号）。「式部外曹司」は宮「内」の式部省の本司に対する「外」と考えられるので、式部省が京内に部局を置いていたことが想定されよう。宮内の式部省は、位置の移動はあるものの、奈良時代を通じて南面大垣内側の宮東南部に立地している。この墨書き土器は宮内から出土したものであるから、式部省外曹司から送られてきた木簡を見ながら、式部省の官人が十

器に習書したものと考えられよう。

その他 宮衛令集解開闢門条古記には、衛上を配して警備する場所の中に「大藏・内蔵・民部外司・喪儀・馬寮等」を挙げている。このうち大藏省、民部外司、喪儀司は宮外にあった官司であることが明らかである。宮内の官衛を衛士が警備するのは自明であって、古記が敢えて衛士の警備区域であることを述べるこれらの官衛は、いずれも宮外官衛であろうとする見解（これらがいずれも広い意味ではクラの区画を有する物品の保管官司であるとの指摘も注目に値する）は妥当なものと思われる。よって、内蔵寮と馬寮もまた宮外官衛の一例に挙げることができよう。

なお、平安宮においては、以上の他に、穀倉院、囚獄司、東西囚獄、檢非違使庁、木工寮、施薬院、左右衛門府、織部司などが宮外にあったことが知られている（裏松固禪『大内裏図考証』など参照）。

以上平城宮における宮外官衛を一つ一つ検討してきたが、それでは左京三条一坊七坪にあった可能性のある官衛はいずれであろうか。倉庫群は見つかっていないから、倉庫を伴う保管官司の可能性は低い。さらに坪の所在位置を勘案すると、可能性のあるのは左右京職、及び大学寮であろう。左右京職の建物配置は不明であるから、当該坪の調査成果と復原されている平安京の大学寮の建物配置が類似することは、あくまで大学寮であることの必要条件を満たしているといえるに過ぎない。しかし、奈良時代前半の造構が希薄であることは、奈良時代中葉以降に機構の整備が進む奈良時代の大学寮のあり方とも合致し、現時点では文献、調査成果の両面から、本遺跡が大学寮の一郭である蓋然性は高いとみてよいであろう。

註

- (1) 渡辺光が「二条大路木簡」（『奈良国立文化財研究所年報 1990、1991年3月』）参照。
- (2) 兵部省については奈良国立文化財研究所『1990年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』（1991年6月）に、また式部省については同『1992年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』（1993年6月刊行予定）にそれぞれ調査成果のまとめがある。
- (3) 平城京において発掘調査によって宮外官衛の可能性が考えられている場所には次のような例がある。1) 左京二条二坊十二坪（奈良市教育委員会『平城京左京二条二坊十二坪 奈良市水道局庁舎建設地発掘調査概要報告』、1984年3月）、2) 左京三条一坊十五・十六坪（奈良国立文化財研究所『1992年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』、1993年6月刊行予定、所収）、3) 左京五条一坊一坪（奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書（昭和59年度）』、1985年3月、70~88頁）、4) 左京五条二坊十四坪（奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書（昭和54年度）』、1980年3月、1~50頁）。なお、奈良国立文化財研究所『平城京左京四条二坊一坪』（1987年3月）IV-2官衛か宅地かには、瓦葺建物の存在の有無を主たる根拠にした宮外官衛か宅地かの分析がある（執筆は上野邦一氏）。
- (4) 橋本義則「奈良・藤原京跡」（『木簡研究』14、1992年11月）、26~28頁。
- (5) 山本忠尚「地方官衛の遺跡」（板崎秀一・森郁夫編『日本歴史考古学を学ぶ』（上）、有斐閣選書880、1983年10月、有斐閣刊）、176、177頁。遺構の詳解は、註（3）の4) 前掲書参照。
- (6) 錦田元一「文献史料からみた恭仁宮」（加茂町教育委員会『史跡山城国分寺跡保存管理計画』

- 策定報告書』、1988年3月)、17~19頁。但し鎌田氏によれば、「幸」と「御」の使い分けは記事筆者の視点の違いによるのであり、「御」と表記する場合には必ずしもその殿舎・施設が宮内にあったことを示すものではないという。
- (7) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』15、1982年5月、35頁。『木簡研究』3、1981年11月、140頁にも紹介がある
- (8) 平城京東二坊二条大路の土壙SD5300から出土した木簡と墨書き器との関係が参考となる(『木簡研究』13、1991年11月、8頁)。
- (9) 東野治之『木簡が語る日本の古代』(岩波新書(黄版)231、1983年5月、岩波書店刊)、182~186頁。
- (10) 但し、一・二・七・八町の四町占地であるのか、七・八町の二町占地であるのかは明確ではなく(裏松固淳『大内裏園考証』参照。京都市編『京都の歴史』第1巻 平安の新京、の別添地図は二町説をとる)、平城京の大学寮の位置を考える際の障害ともなっている。
- (11) 岸俊男「難波宮の系譜」(『京都大学文学部研究紀要』17、1977年3月。のち、岸俊男『日本古代宮都の研究』、1988年11月、岩波書店刊。に再録、348頁)。
- (12) 今泉隆雄「告知札と大学寮」(『奈良・平城京跡』『木簡研究』4、1982年11月)、19頁、岸俊男「産まれた馬」「古史寸考十二題』9、岸俊男「古代宮都の探求」、1984年5月、培養房刊、42~46頁、鎌田元、註(6)前掲論文、18頁。このうち、今泉・鎌田両氏は四坪占地説、岸氏は二坪占地説をとる。
- (13) 岸俊男、註(12)前掲論文、43頁。但し、ここでは何坪占地かの言及はない。
- (14) 奈良国立文化財研究所『1989年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(1990年6月)、II-1 朱雀門の調査(1)、8、9頁。
- (15) 鬼頭清明『木簡の社会史一大平人の日常生活』、1984年6月、河出書房新社刊、126~128頁。
- (16) 岸俊男「難波の大殿」(大阪市文化財協会『難波宮址の研究』7 論考編、1981年3月。のち、岸俊男、註(11)前掲書に再録、420~428頁)。
- (17) 向日市教育委員会『長岡京本編』1、解説(1984年10月)、第3章 5 太政官御家と木簡(執筆は今泉應雄氏)、97~107頁。なお、ここは長岡京の新条坊呼称に従うと、左京三条二坊八町であり、平城京における太政官御家推定地に近接した位置となる。
- (18) 民部省廩院については、佐藤信「民部省廩院について」(土田直蔵先生還暦記念会編『奈良平安時代史論集』下巻、1984年9月、吉川弘文館刊)参照。
- (19) 岸俊男、註(16)前掲論文(註(11)前掲書、425~427頁)。
- (20) 北村優季「平城宮の『外司』一令集解宮衛令開闢門条占記をめぐって」(『山形大学史学論集』8、1988年2月)、49頁。
- (21) 奈良国立文化財研究所『1992年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(1993年6月刊予定)、式部省東官衛の調査の項参照。
- (22) 北村優季、註(20)前掲論文、51~53頁。

4 結 語

平城京においてはこれまで、左京を中心として都市開発にともなう事前調査が数多く行われ、長屋王邸宅跡の発見をはじめとする、数多くの成果をあげている。今回の調査は、宮近くにおける京の調査の中でも、宮の前面地区、左京三条一坊における調査として注目された。

調査の結果、奈良時代後半の掘立柱建物・井戸・土壙などの遺構を検出し、土壙・井戸などから、上器を中心とする大量の遺物の出土を見た。

遺構はA・Bの2時期に区分される。いずれの時期も、南に庭を持つ東西棟の掘立柱建物を正殿とし、西側に脇殿群を伴う構成となる。正殿の北には井戸を配する。正殿域の南には、大形で遺物を多く含む土壙と小形の掘立柱建物で構成される別の区画がある。特にA期にあっては、坪内を2条の道路によって区画している。

A期はSE5767やSK5769出土遺物が、平城宮土器編年Ⅲ期の新段階に位置付けられ、B期では、SE5765やSK5770の出土遺物が、平城宮土器編年Ⅳ期以降に位置付けられる。A期を奈良時代後半、B期を奈良時代の後半から末と考えることができよう。

これらの遺構群の性格については、IV章の2と3において、遺構配置と文献史料の両面から考察が尽くされている。遺構配置からは、まず貴族の邸宅という考え方方が否定され、京内にあった官衙的施設と考えられた。貴族邸宅の代表例であり、位質的にも近接する長屋王邸と比較すると、建物の建て替えが少なく、密度も低い。さらに下級の貴族邸宅を考えるのは、宮前面という立地からみて不可能である。

京内にあったと考えられる官衙のなかで、位質のはっきりしないものは、左右京職、大学寮、民部省庫院などがあげられる。このなかで庫院は物品の収納を目的とした多数の倉庫の存在を特徴とするところから、当該地の遺構配置にあわない。可能性としては京職と大学寮が残ることになる。平城京の大学寮については直接その位置を知る史料に乏しいが、平安京での位質が、当該地と同じ左京二条一坊の西北部であることが注目される。また大保十一年刊の「大学寮図」では、正殿・脇殿で構成される木寮と、その南に厨が描かれ、今回検出した遺構配置との類似性がみられる。正殿・脇殿と推定される区画の南にある2基の大形土壙からは、「厨」「飯」「米」の墨書き土器と、大量の土器群、それも貯蔵形態が目立つといった結果が得られている。この土壙と小形掘立柱建物を厨と推定するうえの根拠となり得る。

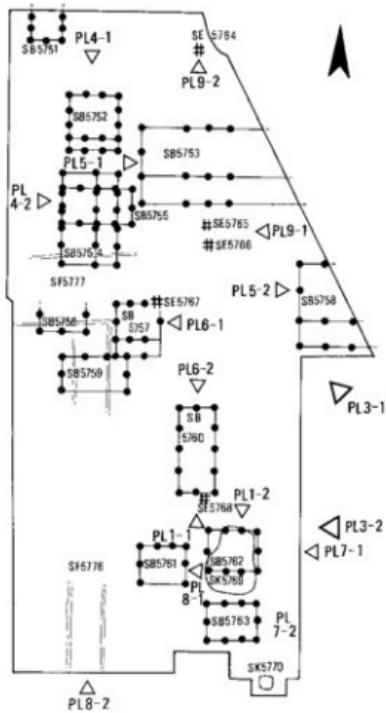
今回の調査では、当該地を大学寮とする木寮などの直接的な証拠は発見されなかった。遺構配置や他の都城との比較からその可能性が推定されたにとどまる。既に、今調査の半年後に十五・十六坪で行われた調査で、2坪にわたる官衙的な性格の推定される遺構群が検出されており、今後周辺地区の発掘調査が進めば、この地の性格もより一層明らかになってくるであろう。



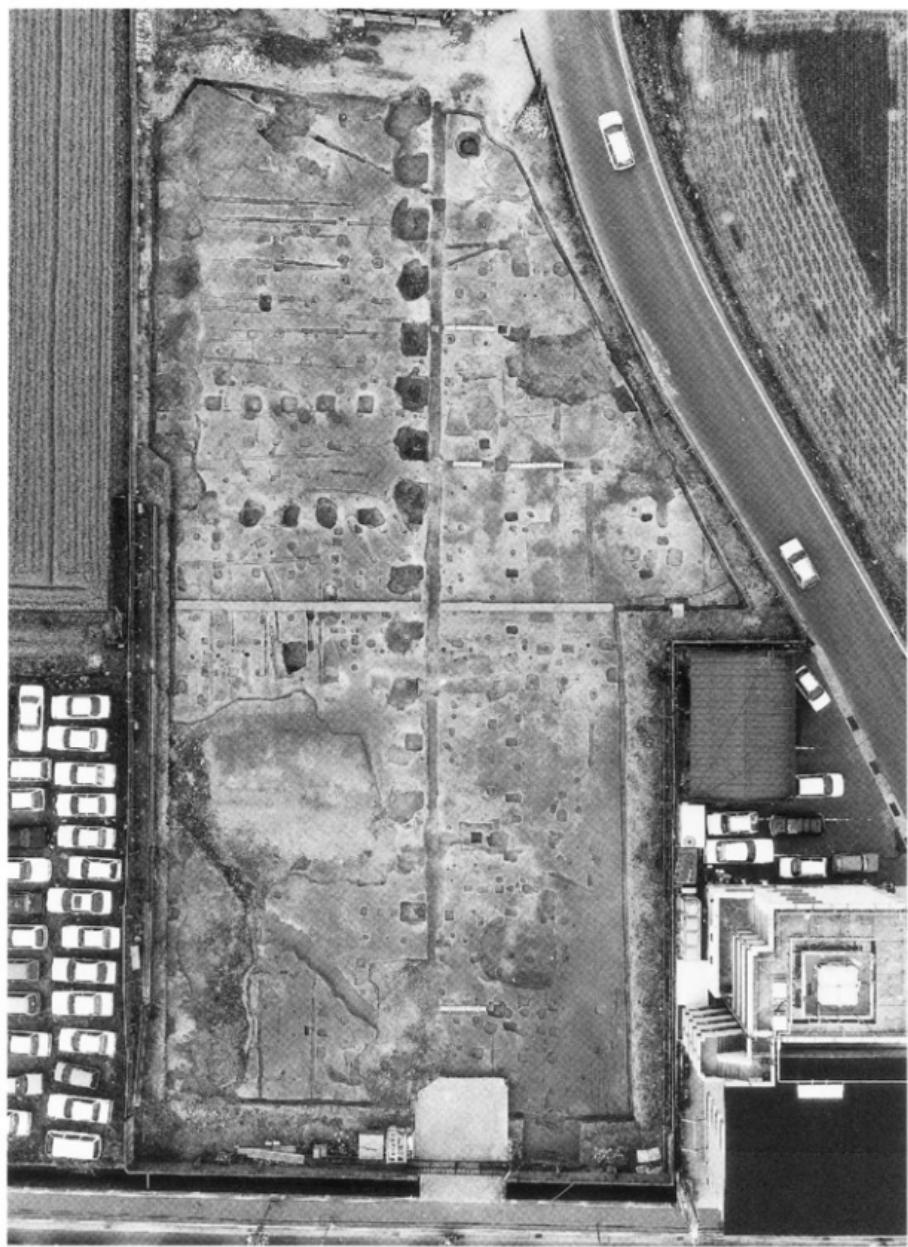
1 SE5768 南から



2 SK5769 遺物出土状況



写真撮影方向



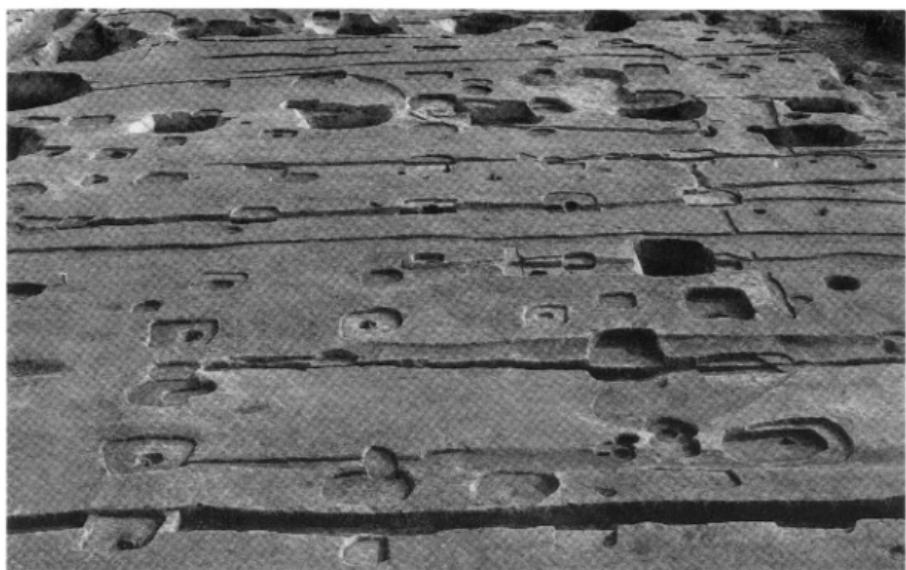
調査区全景 (1 : 400)



1 調査区北半 南東から



2 調査区南半 東から



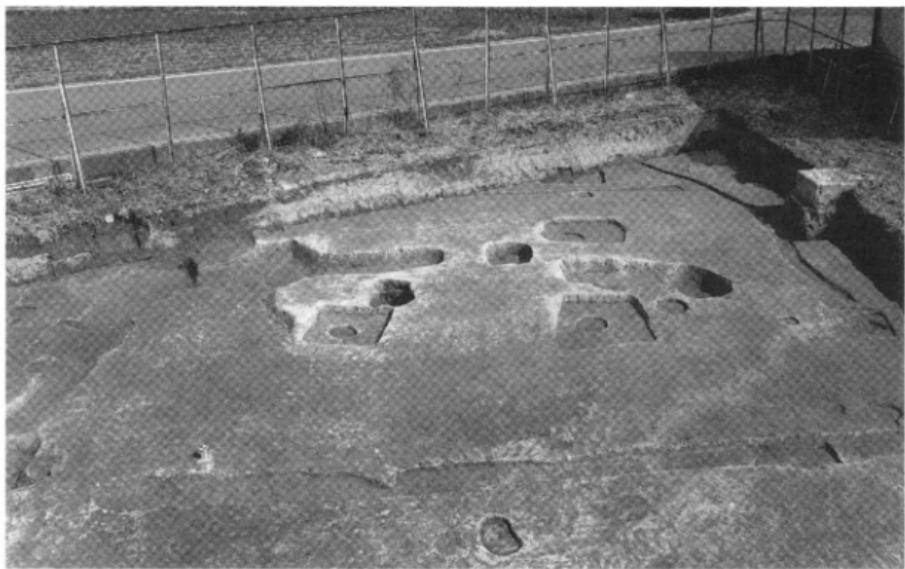
1 S B5752・S B5754 北から



2 S B5755 西から



1 SB5753 西から



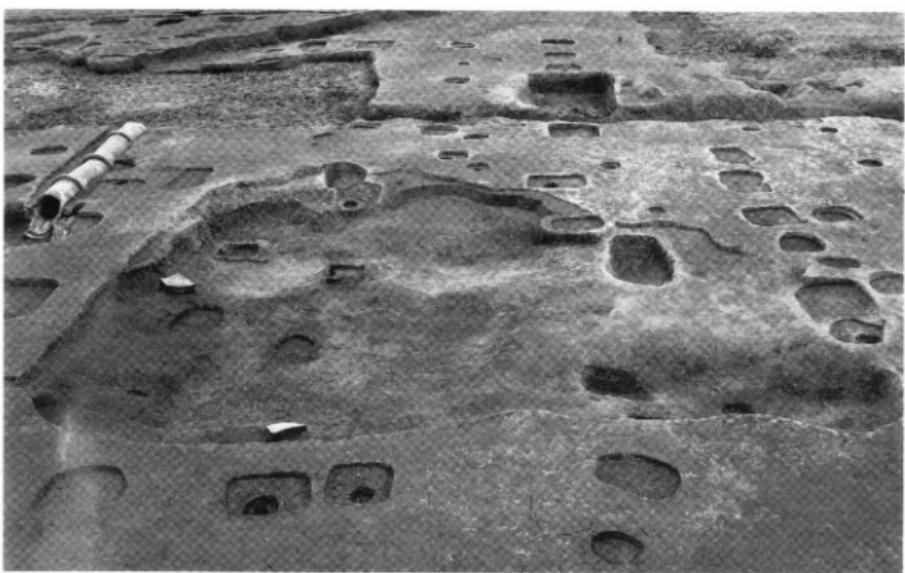
2 SB5758 西から



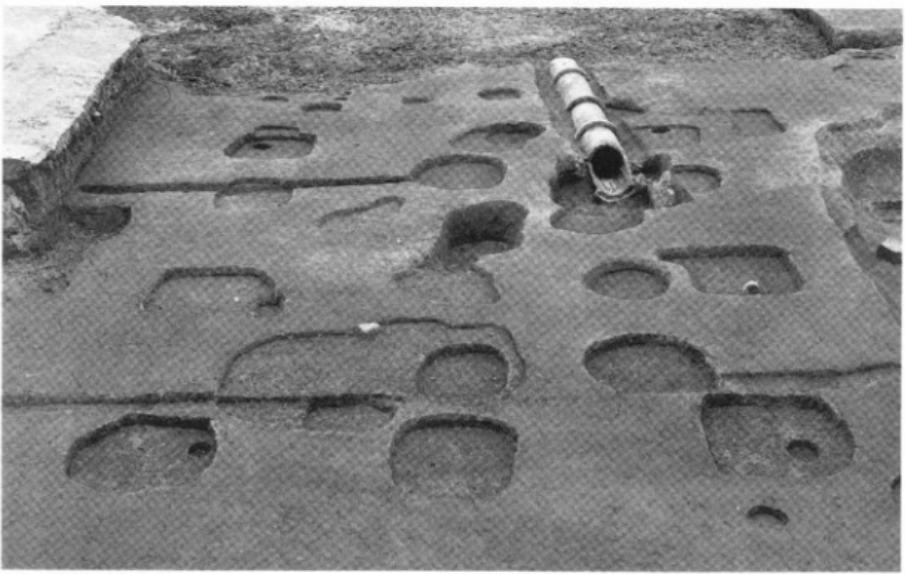
1 S B5757 東から



2 S B5760 北から



1 S B5762・S K5769 東から



2 S B5763 東から



1 SB5761 東から



2 SF5776 南から



1 SE5765・SE5766 東から



2 SE5764 南から

平城京左京三条一坊七坪発掘調査報告

1993年3月25日 印刷

1993年3月31日 発行

編集発行 奈良国立文化財研究所
奈良市三条町2丁目9番1号

印 刷 明新印刷株式会社
奈良市南京終町3丁目464番地

平城京左京三条一坊七坪(平城宮跡第231次)発掘調査遺構平面図

